
狐、閃光となりて.....

菖蒲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐、閃光となりて……

【Nコード】

N5681A

【作者名】

菖蒲

【あらすじ】

某少年誌で超人気連載中の作品、NARUTOの再構成です。色々とは原作と違うことが平気で起こります。

ブローグ

「四代目！ 下がるのじゃ。ここはワシが……」

突然の九尾来襲により、壊滅寸前にまで追い込まれた木の葉隠れの里。その炎上する街中で、三代目火影は声を荒げた。その眼に写るのは、未だ破壊を続ける悪魔と、それにたった一人で挑もうとする、この里の若き長『四代目火影』。

「ダメですよ、三代目。このケリは私が着けます」

「じゃが！」

三代目は、この若者が何をしに行くのかを知っていた。そして、その結果も。このままこの若者を行かせれば、そこに待ち受けるのは死。この若者を死なせるくらいなら、自分が変わりに行きたかった。しかし……。

「三代目、あれの強さは人知を超えています。失礼とは思いますが、今の三代目では太刀打ちできません」

「むう……」

そう、全盛期ならいざ知らず、今の年老いた身では、あの術を発動する段階にまで持つていくことすら出来ないのだ。その前に殺されてしまうのがオチである。

「それに、あなたにはこの里を護ってもらわなければならない。それを頼めるのはあなただけなんです」

「しかし……」

「三代目、今の火影は私です。私には里を護る義務がある。それに……」

渋る三代目に、四代目は諭すようにそう言うと、一旦言葉を切った。

「『木の葉の同朋は俺の体の一部一部だ』初代様の言葉ですが、気持ちは私も同じです。私個人としても、里の皆を護りたい。そして私にはそれができる力がある」

「四代目、お主……解った、頼む」

初代の言葉を出し、自分の決意を語る四代目に、三代目はもはや何も言う事はなかった。気持ちは自分も同じ。それだけに、これ以上は四代目の決意に水を差す事になる。三代目は、そう判断したのだ。

「三代目、後は頼みます。そしてお願いがあるのですが、これを」

三代目の言葉に満足したのか、四代目は優しい微笑で答えると、巻物を一つ取り出した。見ると、それには何かの術式が施してある。

「これは？」

「私の術を収めています」

「なんじゃと！」

三代目が驚くのも無理はない。四代目の術は、飛雷神の術をはじめ、その多くが謎のバールに包まれている。それがいきなり目の前に出されたのだ、驚くなと言う方が無理である。

「ああ、大丈夫です。それは特定のチャクラの持ち主にしか開けられないようにしています。それでお願いというのは、それが反応したチャクラの持ち主にその巻物を渡してやってくだりませんか？」
「う、うむ、承知した。しかし特定のチャクラというのは……」
「それは申し訳ありませんが言えません。ですが、三代目だからこそ、お願いします。どうかその者が現れたら、それを渡してやってください」

四代目が自分の術を渡すほどの人物、その人物に非常に興味が湧いたが、三代目は追求せずに、ただ頷いただけであった。その反応に、嬉しそうに微笑すると、四代目はその場から姿を消した。

瞬身の術など比べ物にならないほどの移動速度、恐らく飛雷神の術だろう。里の者は知らないが、四代目は、里周辺のあちこちに術式を施しておいたのだ。

「四代目、すまぬ」

三代目の自責するような呟きが、炎上する街中に、やけにきれいに響き渡った。

二時間後、今までそこにあつた九尾の姿が突然消え失せた。四代目の術が発動したのだ。

「終わったか……」

周りが喜びを露にしている中ひとり、寂しそうにそう呟いた三代目は、数人の部下を引き連れ現場の確認へ赴いた。

「……四代目」

一昨日まで木が生い茂っていたその場所には、もはや何も残されてはいなかった。あるのは脇腹をこつそり抉られ、片足を失った四代目の亡骸と、もう一つ。

「赤子じゃと？」

この凄惨な場に全く似つかわしくない、一人の赤ん坊だけだった。この状況にも関わらず、すやすやと穏やかな寝息を立てながら眠っている。

「一体これは……何！」

何故こんな所に赤ん坊がいるのかは解らなかったが、放って置く訳にも行かないので三代目が近づいた時、それは起こった。

四代目から受け取ったときから手に持ったままだった巻物に書かれた術式が、突如光り始めたのだ。四代目はこの術式は特定のチャクラにしか反応しないと聞いた。という事はつまり……

「この子が、四代目が術を托した者」

という事になる。そして不可解な事がもう一つ。その赤ん坊の腹に、封印式が書かれていたのだ。

（状況から考えて、この封印式を書いたのは四代目じゃろう。しかし、普通は赤子にそんな事をする必要は無いし、暇も無かった筈じゃ。しかし四代目はそれをした。この場でそんな事をする必要があるのは……九尾の封印か！）

そこまで考え、三代目はこの赤ん坊の正体を悟った。

「四代目の子か……」

大体、九尾を封印するというのに他人の子を使える筈が無い、更にこの子に四代目は自分の術を残した。これだけ揃えば、答えを見つけるのは容易であつた。

それにしても、これからが大変だ。三代目は頭を抱えた。この子が四代目の子であることを里に伝えるわけにはいかない。大体推測はできるが、証拠が無いのだ。そんな事を公表するわけにはいかない。

それに、九尾を封印された子であることもいずれ里の皆に知られるであろう。いくらこの場にいる者に口封じをしたところで、情報は漏れるものだ。十中八九、ばれるだろう。そうなれば里の皆に迫害を受けるのは明白だ。

「どうしたものか……」

途方に暮れる三代目であつたが、四代目の遺したこの赤子を下にする訳には行かない。

その赤ん坊は『うずまきナルト』と名づけられ、三代目預かりとなつて、木の葉隠れの里に迎えられた。

第一話「始まり」

九尾の木の葉襲撃から五年。一度は壊滅寸前にまで追い込まれた里も、老体を推して再び就任した三代目の、見事なまでの指導力と統率力により、ようやく復興の兆しが見え始めてきた。街にも活気が戻り、あと二年もすれば、以前の里と変わらぬ姿になるだろう。しかし、活気が戻ったといっても、人々の心の奥底にある闇は、決して消え去った訳ではなかった。九尾への怒り、憎しみ。それらは、人々の心の中でむしろ、日を追うごとに強くなっていた。そんな折、ある噂が、里の中で広まり始めた。

「九尾が子供に姿を変えてこの里の中にいる」

これがその内容である。当然、人々は殺気立った。自分の家族や友が死んだのに、何故あの狐が生きている？ そういった思いが日増しに強まり、里の中には、いつしか殺伐とした空気が流れるようになっていた。

「はぁ……どうしたものかのお」

火影執務室で三代目はひとりため息をついた。無論、恋煩いではない。里に流れている噂の事についてだ。

三代目は、噂の子供が誰であるのかを知っていた。そして、その子供が九尾が化けている訳ではない事も（実際は封印されているだけである）。

その子供の名前は『うずまきナルト』五年前、三代目が保護した少年である。この少年、ナルトは、とにかくよく笑う子だった。里

の復興に尽力し、疲れきったときでも、ナルトの無邪気な笑顔を見るだけで気持ちや和み、やる気が沸いたものである。

最初の内は、やはり九尾が化けているのでは、などいろいろな危惧していたものだが、ナルトのそんな笑顔を見てみると、この子供があつた九尾だとは到底思えなかった。

だが、今の里人達に、それを伝えることは不可能だろう。完全に殺気立った今の状態では、ナルトに九尾が封印されていると知った時点で殺してしまいかねない。

「はあ……どうしたものか」

再び、三代目の吐息が、淀んだ部屋の空気と交じり合った。実際、これ以上ナルトに九尾が封印されているという事実を隠し通すのは無理だろう。むしろ、今まで隠し通せていた方が不思議なくらいだ。里人に伝えるのは論外、かといって、隠し通そうにもいずれ知られることになる。

ただでさえ重たかった空気が、より、重たくなったように感じた。

「ため息ばかりついとると幸せが逃げますぞ、のお、三代目」

沈んだ三代目の心に、部屋の空気を払拭するような陽気な声が響いた。下を向いていた顔を上げると、ドアに寄りかかるようにして、自らの良く知る男が立っていた。

「自来也か……アレは、持ってきたのか？」

「無論、そのためにわざわざ来たんですからのお」

急に神妙な面持ちになり話し掛ける三代目に対し、自来也と呼ばれた男も、同じく神妙な面持ちで答える。

「これに入っとります」

「ふむ、これが……」

懐から取り出した紙袋を、自来也は三代目に手渡した。三代目はそれを受け取ると、慎重に袋を開け、中身を確認した。

「こ、これが……」

「そう、これが……これこそが、イチャイチャパラダイスの下巻、すなわちイチャパラの最終章！」

「むう、見事なり自来也。どれほどこれを待ち望んだ事が……」

そう、それは、恋愛初心者の主人公とヒロインが、次第に大人の愛に目覚めていく純情交際物語、イチャイチャパラダイス（下巻）であつた……ちなみに十八禁である。

「……まあこれはこれとして、自来也よ、お主に頼みたい事がある」
「ん、なんですかのお」

先程までの鼻の下を伸ばした表情とは打って変わって、いきなりシリアスな表情を作る三代目と自来也。ただし、三代目はまだイチャパラを持ったままである。

「お主に、ナルトを預かってもらいたい」

「……ナルトというと、あの」

「そうじゃ。九尾を封印されておる子じゃ」

依然、シリアスな表情のままで話を続ける三代目……しつこいよ
うだが、イチャパラは持ったままである。

「……何故、ワシなんですかのぉ」

「お主しかおらんのじゃ。今、里中が九尾を探し出そうと躍起になっておる。今まではなんとか隠し通せたが、里の者も薄々勘付いてきとる。里の態勢も未だ万全ではない、あの子に掛ける時間がワシには無いのじゃ」

下唇を噛みながら沈痛な表情を浮かべる三代目。その様子を見かねたのか、自来也は、溜め息を一つ吐き出すと、頭を掻きながら三代目に話し掛けた。

「ワシも大蛇丸の監視をしなきゃならんし、危険が無いわけじゃない。それでも良いですかのお、三代目」

「……残念なことじゃが、今の里におけるよりは安全じゃろう。頼む、自来也」

「解った。それじゃあ、ワシはもう里を出るんで、ナルトの居場所を教えて貰えませんかのお？」

「あやつはワシの息子夫婦に預けとる。ワシの家におけるはずじゃ」

「それじゃあ今から迎えに……」

「三代目、大変です！」

執務室のドアが勢い良く開き、かなり慌てた様子の忍びが入ってきた。

「何事じゃ、騒々しい」

「うずまきナルトがいなくなったそうです」

「なんじゃと！」

三代目は机に手をついて荒々しく立ち上がった。自来也も軽く目を見張っている。

「息子様から連絡がありまして、少し目を離れた隙に家から消えて

しまっていたそうで、恐らく街に行ったと思われます」

「いかん、今あやつが里人の前に出て、万が一のことがあればどうなるか解らん。詰所における忍びにナルトを探して保護するように伝えよ！ 大至急じゃ」

「は、はい」

三代目の命令を受け取った忍びは、大慌てで執務室から飛び出していった。余りに慌てていたので、ドアを閉めていくのも忘れていたようである。

「自来也、すまんがお主も出てもらえんか？ 里の忍びを頼りにしとらん訳ではないのじゃが……」

「里人も忍びも同じ、という事か。それじゃ、ワシの被保護者を見つけに行くとしますかのお」

そう言うと、自来也はその場から姿を消した。

「へえ、やっぱり広いつてばよ」

ナルトは、街を歩いていた。その目は、新しいオモチャを貰ったときのようにキラキラと輝いている。

この五年間、ナルトは一回も外に出た事が無かった。里人にばれないようにするため、三代目がつた処置なのだが、ナルトは元来好奇心旺盛な子供である。家もなかなか広くて楽しいのだが、やはり外の世界というのを見てみたいのだ。

「おいボウス、お前見ない顔だな」

ナルトが大通りを歩いていると、突然、誰かに声をかけられた。声の飛んできた方を見ると、ラーメン屋があり、その暖簾の前に気の良さそうなおじさんがいた。

「ボウズ、どつから来たんだ？」

ナルトがちょこちょここと駆寄ると、おじさんが屈んで聞いて来た。

「えーっと、あっちだつてばよ」

「あっちつて……」

ナルト指を差す方を見ても、家がありすぎてどれなのか解りはしない。

「ねえ、それよりオツチャン、ラーメンつて何？」

突然、ナルトが暖簾を指差しておじさんに聞いた。

「何つて、お前ラーメン知らねえのか」

「だからラーメンつて何だつてばよ」

ナルトは、ラーメンを知らなかった。今まで家庭料理しか食べたことのないナルトには、ラーメンはまったく未知の物だったのだ（家庭料理に普通ラーメンは出ない）。

「ラーメンを知らねえとは、ボウズ、お前人生の半分以上損してるぞ」

「え、嘘！ そんなに」

人生の半分といつても、ナルトはまだ五年しか生きてない訳であ

るが、その辺はノリである。

「よっしゃ、ボウズ、俺がラーメンを食わしてやろう」

「え、ホント！」

「応よ。ま、入れ」

おじさんに促されるままに、店の中に入るナルト。彼は知らない、この店が、天下に名を轟かせるラーメン一楽だということを。そして、彼に話し掛けたおじさんが、この店の主人、テウチだということ。

「……ヘイ、お待ち！ たんと食べ、ボウズ」

「応！ いったただつきまゝす！」

威勢の良い声と共に、良い香りのするラーメンが、椅子の上に立ったナルトの前に出された。ちなみに何故椅子の上に立っているのかといえば、単純に背が足りないからである。

ズルズルと音を立てながら物凄い勢いでなくなっていくラーメン。台に汁が大量にこぼれたが、テウチは全く気にしなかった。どうやらナルトの食いつりが気に入ったようである。

「ボウズ、良い食いつぶりじゃねえか。どうだ、美味しいか？」

「ふわいっへはよ（美味いってばよ）！」

「ガッハハハ、そうか、美味しいか」

箸を持った手を振り上げて声を上げるナルトと、豪快に笑うテウチ。どうやらうち解けたようだ。

「ふう、全く、こんな所におったとはのお。人の気も知らんで」

「おや、自来也様、らっしゃい」

「おお、テウチ、久しぶりだのお」

ナルトがラーメンを食い終えて、テウチと談笑していると、男が一人入ってきた。無論、自来也である。たまたまこの前を通りかかったら、元気の良い子供の声が聞こえてきたので、もしかと思っ入ってみたのである。

「ん？ オツチャンこの変なの知ってんの？」

「変なのとはまた、ひどい言われようだのお。まあ良い、テウチ、コイツ貰っていくぞ」

自来也はそう言うと、ナルトの服の襟をムンズと掴んだ。

「ええ、解りました。ボウズ、また来いよ」

「え、え？ お、おー？」

一人状況の掴めていないナルトは、テウチの言葉に何故か疑問系で返し、襟首を掴まれたまま、一樂を後にした。

「おお、自来也。見つかったか」

「ええ、一樂でラーメン食つとりました」

「なんと」

一樂で捕獲されたナルトは、そのまま火影執務室まで連れてこられた。未だ、襟首を掴まれたままである。

「あー、爺ちゃん、コイツなんなんだつてばよ」

ナルトが三代目に向かって、自来也を指差しながら言った。

「そやつはワシの弟子じゃ。それよりナルト、お主外の世界を見てみんか？」

「え、外！」

外という言葉に反応して、ナルトの目が輝く。五年間家の中で過ごしたナルトにとって、外は憧れなのだ。

「そうじゃ、そやつは外の世界を色々と旅して周つとるんのお、お主も一緒に連れて行ってもらうことになったのじゃ」

「ホントに、ホントに、くうく、やった〜！」

既に自来也からは開放されていたナルトは、外に行けるとわかると、体全体を使って喜びを表現し始めた。その様子は、普通ならば微笑ましく思えるだろうが、今の三代目には、ナルトが不憫でならない。

「……ナルト、先に家に帰って旅の支度をしておきなさい。そのうちこやつが迎えに行くじやろう」

「解ったってばよ。んじゃ、爺ちゃんバイバイ」

三代目に促されたナルトは、飛び跳ねるのを止め、部屋から出て行った。

「ナルト、準備は出来たかのお」

「おー、いつでもOKだってばよ」

ナルトが準備完了してから遅れる事二十分、自来也が現れた。ナルトはそれに、元気良く片手を振り上げて応える。天気は快晴、旅の出発には最高の天気だ。

「よし、それじゃあ行くとするかのぉ」

「おー！」

このとき、ナルトは気付かなかった。自来也の手に、淡く光る巻物が握られていた事に。

この日、木の葉隠れの里から、凶悪な九尾の狐が、人知れずその姿を消した。里中に広まっていた噂は、それから直に消えてなくなり、里は再び穏やかな空気に包まれ、着々と復興していった。

第二話「狐の帰還」

木の葉隠れの里。忍び五大国の中でも、特に力の強い火の国に位置し、固い結束力と、幾多の優秀な忍びにより、その繁栄を誇った里である。だが、十年前、突如として襲来した九尾の妖狐により、里は滅亡の危機に瀕した。四代目火影と、数多の忍びの犠牲により、辛うじて九尾を封印する事に成功したものの、それで危機を完全に脱した訳ではなかった。

木の葉の力が衰えたのを機に、他里は木の葉を潰そうと謀略を張り巡らせ、自国内では、木の葉を完全に取り込もうとする大名が策を練る。まさに四面楚歌の状況であった。だが、それすらも乗り越え、里を復興させたのは、三代目の働きによる所が大きいであろう。三代目火影。二代目火影の下で腕を磨き、プロフェッサーの異名と共に、他国にまでその名を轟かせる超一流の忍びである。また自らも、後に『三忍』と呼ばれることとなる三人の忍びを育て、木の葉忍軍のエースとして、里に貢献してきた。

火影就任後もその手腕は衰えず、その指導力と統率力で、里を一つに纏め上げてきた。そして、自らの後継者となりうる者、即ち四代目に火影の名を明渡すと、自らは隠居生活に入った。

だが、九尾襲来により、四代目が死去すると直に、上層部の要請を受け、火影に再び就任。長年培ってきた己の経験と手腕により、里の復興に尽力する。

と、このように、長年里のためにその身を捧げ、今では救国の英雄とまで言われている三代目だが、一つ気がかりな事があった。『うずまきナルト』という少年のことである。この少年は、九尾を封印された少年で、腹に四象封印を重ね掛けした八卦の封印式が施されている。五年前、自らは政務で忙しく、弟子に預けて里外に、結

果的に厄介払いという形で追い出してしまった子供である。

本来九尾を封印している英雄として見られるはずの子供を、追出すような形になってしまい、里の復興を嬉しく思いながらも、心の片隅に、いつもその子供の事が引っかかっていた。もしかすれば、四代目の子供であるかもしれない、その子供のことが……。

「んー、なんか久しぶりの木の葉だつてばよ。五歳のときに出て以来だし、五年ぶり？」

この日、木の葉の里に、凶悪な九尾の狐が再び、その姿を現した……訳ではない。そこにいるのは金髪碧眼の少年。まだあどけなさの残る顔立ちをしているが、どこか人を惹き付ける雰囲気醸し出している。

「爺ちゃん元気かなあ？ まさか寿命でポツクリなんて……ないよ、ね？ なんか心配になってきたつてばよ」

里の入り口で、いきなり悲観的な考えを持ち出す少年。この少年こそは、里の人々とは接触する事すら許されず、さらに、覗きの常習犯であり、しかもそれを取材と言い張り、あまつさえ自分の書く小説（十八禁）のネタとして使用する重度の変態に預けられ、里を追い出されてしまった凶悪な九尾の化身、『うずまきナルト』である。

「早く爺ちゃんのトコに行こうつと。エロ仙人からの届け物もあるし」

しかし、この少年は、そんな悲壮感など微塵も感じさせず、顔に

は眩しいほどの笑顔を貼り付け、躍動感溢れる動きで歩き出した。ちなみにエロ仙人とは、前述の『重度の変態』のことである。あしからず。

「……おお、来たか、ハヤテ、アンコ、紅」

「ハッ、で、どんな任務でしょうか？」

火影執務室、今、ここに三人の特別上忍が呼ばれていた。一人目は月光ハヤテ。剣術の使い手で、その実力はもはや上忍にも匹敵するが、病弱で、三分しか全力で戦えないと言う弱点を持っているため、未だに上忍に昇格できずにいるかわいそうな人である。二人目はみたらしアンコ。一芸に秀でる特別上忍の中で、特に戦闘に優れる人物であり、かつては禁術とオネエ言葉を好んで使うシヨタコンの変態に師事した事もある女性である。本人はその事を人生最大の汚点だと思っているらしい。三人目は夕日紅。木の葉にいる、数多くのくの一の中でも、屈指の色気を誇り、まさに、ザ・くの一といった女性である。その実力の方も高く、特に幻術のスキルは抜きん出ている。

「うむ、お主らにはこの密書を火の国の大名に届けてもらいたい。途中、他国の忍びによる襲撃が予想されるが、お主らならやれるじやろう。頼んだぞ」

「ハッ」

三代目の言葉に、片膝を付いて返事をする、目の前に出された密書をハヤテが持ち、三人はそのまま執務室を出て行った。ところが、一分も建たないうちに、紅が戻ってきた。

「ん？ どうした紅、なにか質問か？」

いきなり戻ってきた紅に、首を傾げながらそう言う三代目。が、紅は俯いていて応えない。様子が変だと思い、再度声をかけてみると、返事の代わりに、いきなり服をはだけさせ、胸が見えるか見えないかのギリギリで止めた。

「な、何をしとる紅！ 早く服を直さんか！」

あまりにも唐突な紅の行動に、動揺する三代目。だが紅は止める様子は無く、更にきわどいところまで服を持っていき、

「……三代目、私では……駄目……ですか？」

などと上目遣いでのたまってくる。三代目はお持ち帰りしたい衝動に駆られるが、必死に我慢する。しかし、紅は止まる所を知らず、上目遣いのままにじり寄ってくる。これには流石の三代目も堪えきれなくなり、遂に理性のスイッチが切れようかというときだった。

「……ギャハハハハ、引っかかった引っかかった。よ、爺ちゃん久しぶり」

ボンツと紅の周りに煙が立ち、その煙の中から一人の少年が出て来た。一瞬呆気に取りられ、状況がつかめなかった三代目であったが、目の前の少年の顔を見ると、驚きとも喜びともつかぬような声をあげた。

「お、お主、ナルトか？」

「おう、爺ちゃん久しぶり。それにしても良かった、爺ちゃん死ん……と、何でもないつてばよ。ア、アハハ」

「？ なんじゃ、可笑しな奴じゃのう」

最後の方に不穏な言葉が入りそうになったが、どうやら三代目には聞こえなかったらしい。

「それにしてもナルト、さっきの変化の術。お主、一体どうやってあそこまで完璧に変化したのじゃ？」

「ん？ ああ、写し身の術のこと？ あれってば父ちゃんの巻物に書いてあったんだってばよ」

「何！ 四代目の巻物じゃと！ いや、それ以前にお主、四代目が自分の父であると言うことを……」

これは二重の驚きであった。四代目の術の中にあれほど完璧な変化の術があったことも驚きであったが（生前の四代目が使っているのを見た事は無かった）、それよりも、ナルトが四代目を自分の父だと認識している事の方が驚きであった。

「うん、知ってるってばよ」

「なんと……」

「何で驚いてるんだってば？ 爺ちゃん知ってたんじゃないの？」

「む、いや、薄々は勘付いておったが……それよりナルト、お主それを一体どうやって知ったのじゃ？」

「ん？ ああ、なんか普通に巻物の最初に書いてあったってばよ」

「そうか……」

三代目は考えた。巻物に書いてあったということは、四代目は初めからあの巻物を自分の息子、つまりナルトに渡すつもりだったということであり、それは四代目が、自分の死を予期していたという事になる。だが、あの時の九尾の来襲は確実にイレギュラーなもの

であつたはずだ。それを予期するなどできるはずが無い。だが、実際に四代目はそれをやっていたのかもしれない、いや、やっていたのだらう。でなければ、自分の術をわざわざ巻物にまとめたりなどしない。これが何を意味するのか、もかしたら四代目は九尾を……

「……ちゃん、爺ちゃん、どうしたんだってばよ」

「ん、お、おお、すまん。少し考え事をな」

ふと、ナルトの声が三代目の耳に飛び込んできた。それによつて、これまで考えていた事が一気に霧散する。そうだ、これ以上考えても埒があかない。結局、今までの考えは全て推測に過ぎないのだ。ピースが欠けているのにジグソーパズルを解く事など出来ないのだから、答えを出すのはまだ早すぎる。三代目は多少強引に、そう自分に思い込ませ、その思考を頭の中から消し去った。

「そついえばナルト、自来也はどうした？」

ここで、三代目は、素朴な疑問を覚えた。ナルトは今まで、自来也と共に旅をしていたはずである。しかし、突然のナルトの登場やらなんやらで今まで気付かなかったが、その自来也がいないのだ。

「エロ仙人なら大蛇丸を探りに行つてゐるってばよ。なんか今回は大分深いところまで探りに行くとかで、俺にはまだ早いから木の葉に戻れって言われたんだってばよ」

「エ、エロ……いや、何でも無い。そうか、大蛇丸を……」

そう口にする三代目の心中は複雑である。大蛇丸、自来也と同じく、三代目が育てた伝説の三忍の内の一人である。忍びとしての才に優れ、言われずともなんでもこなす、まさに天才。少し心に闇を抱えてはいたものの、三代目としては自慢の教え子だった。だが、

その才ゆえに野望に取り付かれ、人体実験により禁術を開発、そして木の葉からその姿を消した。大蛇丸が何を考え、何をしようとしていたのか、それは本人にしか解らない。だが、三代目はその師として、命を賭して、不肖なる弟子の野望を潰すと、決心している。

「なあ爺ちゃん、俺ってばエロ仙人に忍者やれって言われたんだけど」

「ん、ああ、それは構わんが、アカデミーからになるぞ」

「全然OKだってばよ。エロ仙人ってば体術とチャクラのコントロールしか教えてくんねーの。だから俺ってば初歩的な術もできねーんだってばよ」

「何、自来也の奴術を教えとらんのか？」

「そうだってばよ。しかも体術のときには手加減なしで殴りかかってくるし、木登りは下に黄泉沼でしょ、水面歩行とか口寄せした蝦蟇背負わせるんだぜえ、お蔭で何度も死にかけたってばよ」

「自来也、あの馬鹿弟子は子供相手に何をやっとなるんじゃ……」

三代目は軽い頭痛がしてきた。まさか子供相手にそこまでするとは。確かに四代目にそういう修行をさせていたとは聞いた事があるが、まさかナルトにまでやるとは思わなかった。

「ん、待てよ、お主さっき術を使っとなかったか？」

ふと、三代目はナルトの言葉の矛盾に気付く。そう、確かにナルトは術を使っていた。しかも見事なまでの完璧な変化の術だ。いや、写し身の術といったか。とにかく、ナルトは術を使っていたのだ。

「ああ、あれは例外だってばよ。父ちゃんの巻物に書いてある術は勝手に覚えて良いんだって」

「そうか。して、他には何かあるのか？ 四代目の術は」

「んー、あるにはあるんだろうけどまだわかんないってばよ」

「わからない？ どういうことじゃ」

「なんかあの巻物ってば、俺のチャクラの量に比例して読める量が多くなるみたいなんだってばよ」

「ほう」

「だから最近まで写し身も使えなかったんだってばよ」

周到なことだ。そう、三代目は思った。やはりあの巻物はナルトを成長させるために書かれたものらしい。ということはやはり、あの推測は正しいのだろうか？

「なあ爺ちゃん、俺ってばアカデミー行けるの？」

再び、ナルトの言葉によって思考が中断される。そこまで深く考える事でもないので、三代目はそのまま思考を止めた。

「おお、そうじゃな、直に手配させよう。入学の手続きが済んだら連絡する、ところでナルト、お主住むところはあるのか？」

「ああ、それなら大丈夫だってばよ。昔工口仙人が住んでた家があるらしいからそこに住むってばよ」

「そうか、わかった。ではそこに連絡させよう」

「んー、解ったってばよ。あ、それと爺ちゃん、どっかに修行で使つて良い場所ない？」

「修行？ それなら里の演習場のどこでも構わんが、そうじゃな、アカデミーの演習場を使ってみんか？ あそこなら授業が終わった後はほとんど誰もおらん筈じゃ」

「ん、そこで良いってばよ。じゃ、爺ちゃんまたな」

ナルトはそう言い残すと、走って執務室から出て行った。残されたのは、三代目一人。

「ふう、四代目か……一体なにを考えとったのかのお」

三代目の微かな呟きは、風と共に窓の外へ飛んでいった。

「爺ちゃんが言ってたのはここだよ……っと、誰かいるってばよ」

火影執務室を後にしてから直、ナルトは三代目に言われた演習場に来ていた。実は場所がわからなかったりしたのだが、道中親切な人がいて、なんとかここまでくることが出来たのだ。三代目は、誰もいない筈だと言ったが、実際は、そこには一人、修行をしている人物がいた。

「ハッ、ハッ、ハアッ」

場内の片隅にある丸太に、一心不乱に打ち込みをし続ける少女。ナルトは知らないが、その少女は、木の葉最強と謳われる日向家の長女『日向ヒナタ』であった。型から推測するに、柔拳だろう。丸太を人体に見立て、同じ箇所にも何度も打ち込んでいるようだ、その場所だけ大きくへこんでいる。結構センスは良いな、ナルトはそう思った。と同時に、まだチャクラのコントロールが出来ていないとも思う。

「おす！ お前がんばってんな」

「え、キャッ！」

ナルトが近くに行つて声をかけると、人がいるとは思わなかったのか、驚いて尻餅をついてしまった。どうやら引つ込み思案タイプ

らしい。

「そんなに驚かなくても良いのに、ほら、手エ貸すってばよ」

「え、え、あ、その……ありがとう」

苦笑しつつ差し出されたナルトの手を、多少オドオドしながらとるヒナタ。その様子を見て、ナルトは不覚にも、可愛いと思ってしまった。自来也のお蔭で風俗嬢のような色気には慣れているが、こうした少女的な可愛さには慣れていないのだ。

「別に礼を言われることでもないってばよ。あ、そうそう、俺の名前はうずまきナルト、お前の名前は？」

「え、えつと、日向……ヒナタ……」

「よし、ヒナタな。でもヒナタってば偉いな、こんな遅くまで一人で修行して」

「え、いや、それは違うよ。私は落ちこぼれだから、人より頑張らないと追いつけないから」

「落ちこぼれ！ ヒナタが？ 冗談じゃないってばよ、ヒナタは絶対才能あるってばよ」

拳を振り上げて熱弁するナルト。

「ええ！ そんなことないよ。私、弱いし、根暗だし、甘いし……」

「いや、絶対センスあるってばよ。さっきの打ち込みだって、スピードも重さもなかなかのもんだっだし、後は柔拳に必要なチャクラのコントロールを上達させればもっと良くなるってばよ」

ナルトの讃辞に対し、謙遜なのか本心なのか、自分の悪い所を次々と挙げるヒナタ。だが、それをも両断し、尚も力説するナルト。

「え、何で柔拳だつてわかつたの？」

「そんなの簡単だつてばよ。柔拳は経絡系を攻撃する体術だから、それにはまず正確な突きを打てる事が絶対条件だつてばよ。で、ヒナタが打ち込みしてた丸太にはへこみがいっぱいあった、てことは突きを何回も同じ場所に打ち込んでるつてことだつてばよ」

「そ、そんなのでわかつちやつたの？」

「へっへーん、当然だつてばよ」

尊敬するような眼差しで見つめてくるヒナタに威張つてみせるナルトだが、実際は自来也からの受け売りである。依然、柔拳の修行をしたときにそんな話をしていたのを覚えていたのだ。

「凄いいんだね、うずまき君は私なんて……」

「ハイ、ストロップ！ うずまき君なんてダメダメだつてばよ。ナルトで良いつてば」

「え、で、でも……」

「良いんだつてば、俺たちもう友達だろ？」

「え、と……じゃあ、その……ナルト君」

「ん、ホントは君もいらないけど、まあそれで良いつてばよ」

頭を掻きながらそう言うナルト。苦笑しているようにも見えるが、実際はヒナタが可愛くて思わず見惚れてしまったのが恥ずかしく、照れ隠しをしているだけである。

「え、つと、じゃ、じゃあナルト君、もう私帰るから、さよなら」

「ん、おう！ また会おうな」

「え……うん！」

もう帰ると言い、足早に去っていくヒナタに声をかけると、極上の笑顔を返された。今まで見た事もないようなその笑顔に、ナルト

は……完全に惚れてしまった。

第三話「鯖威張る？」

ナルトが木の葉に帰還して、二年の月日が経った。それと同時に、凶悪な九尾の狐も、里に帰ってきたことになる。もしそれが知れてしまえば、間違いなく木の葉の里はパニックになってしまいうだろう。だが、里人はその事実を知らず、平穏無事な日々を送ってきた。無知とは良いものである。

この二年で、ナルトの生活で変わった事がある。まず一つは、アカデミーに通うようになり、友達が出来たことだ。今までは、自来也と旅をしてきたため、同年代の友達など出来なかったのだ……いや、正確には一人、ナルトにも友達がいた。だが、その親友はもう、この世にはいない。とある事件の際、死んでしまったのだ。

まあ、そのことは取りあえず置いておく。ともかく、ナルトには友達が出来た。それによってナルトも年相応の遊びをできるようになった。

二つ目は、術の修行を始めたという事である。今まで、自来也に体術とチャクラコントロールしか習ってこなかったナルトにとって、これは非常に楽しいものだった。だが、アカデミーで習う変化の術や変わり身の術、それに分身の術などは、チャクラのコントロールを殆ど完璧にこなしているナルトにとっては、難易度など皆無に等しく、一度見ただけで出来てしまった（実際は、変化の術は覚える必要がないのだが）。これではつまらないため、今は四代目の巻物の新しく見れるようになった術を修行中である。

そして三つ目、というか最後だが、『伴侶』といえる存在が出来たことだ。言わずもがな、日向ヒナタ嬢である。二年前、ナルトはヒナタに惚れてから猛烈なアタックを繰り返し、晴れて、『彼氏彼女』をすっ飛ばし、『結婚の約束』を取り付けたのだ。ちなみに、

某重度の変態の教育が、これには深く関与していると思われる。ちなみにその教育とは、街で美人な女性を見かけたら取りあえず声をかけるとか、風俗店を見かけたら脇目も振らず入っていくとか、覗きを取材と称し、しかもそれをネタにして小説（十八禁）を書くような教育である。まあ、そのお蔭というかなんというか、ともかく二人は未来の夫婦（？）になれたわけであり、今は所構わずストロベリっている。

とまあ、そんな感じでナルトはこの二年を過ごしてきたわけである。そして今日、遂に、忍者になる日が来た。

「次、うずまきナルト！」

「オッス！」

試験官に名前を呼ばれ、試験を行う教室へ向かうナルト。ちなみに今年の試験課題は分身の術、ナルトにとっては楽勝である。

「来たか。ナルト、わかってるだろうが課題は分身の術だ」

「わかってるってばイルカ先生、んじゃま」

ボンツと煙が立ち、出てきたのは教室に収まりきらないくらい大量のナルト。ざっと百人はいるのではないだろうか。狭苦しい教室に百人も分身を出したため、当然部屋はぎゅうぎゅう詰の状態になる。

「のわっ！　だあー、ナルト、わかったから分身消せ、合格だ合格！」

「え、マジ？　よっしゃあー！」

分身に押しつぶされ、息が出来なくなったイルカが必死に叫ぶと、再び煙と共に分身が消え、両手を突き上げて喜ぶナルトだけが残っ

た。

「ほら、ナルト、額当てだ。今日からお前も一人の忍者だ、頑張れよ」

「おう！ 当ったり前だつてばよ」

イルカから額当てを貰い、意気揚揚と教室から出て行くナルト。ちなみに某教師Mは、禁術を書いた書き物を手に入れようと行政府に忍び込んだところ、普通に暗部に捕まって、あえなく御用となった。

「ナルト君、おめでとう！」

「ヒナタ！ ありがとうつてばよ。これからは一緒に下忍で頑張るつてばよ」

「うん！」

ナルトがアカデミーから出ると、いきなりヒナタが飛びついてきた。よろけながらもそれを受け止めると、満面の笑みで応える。しかし、アカデミーの校門の前で抱き合っている男女……どこからどう見てもヴァカップオである。ちなみに周りからは、男共の殺気の籠った嫉妬の視線がナルトにむかって惜しげもなく注がれているが、ナルトはそれを完全に黙殺している。

「おーおー、お熱いこつて。ていうか良く飽きねエなアお前等」

「ん？ シカマルか。良いじゃん、ヒナタつてば暖かくって気持ち良いんだから」

校門前でナルトとヒナタがイチャついてっていると、誰かが声をかけてきた。黒髪を縛り、めんどくさそうにポケットに手をつ突っ込んでいる少年、奈良シカマルである。シカマルの冷やかすような言葉に

顔を赤くさせるヒナタだったが、ナルトは赤くさせるどころか、平然としてさらに惚気をかます。周りの殺気がさらに高まった。

「けっ、言ってる傍から惚気かよ。ま、どうでも良いけどな」

「へん、悔しかったらシカマルも彼女作ってみろってばよ」

「アホ言え。女なんてめんどくせーだけだぜ。じゃあな、俺は帰って寝るわ」

「おう、またな」

シカマルは、ナルトと軽口を叩き合った後、欠伸を噛み殺しながら帰っていった。

「気を、使わせちゃったかな？」

「いや、あれはホントに眠かったただけだろ」

「クス、そうかもね」

「そうだってばよ」

そう言って、笑いあう二人。また殺気が濃度を増した。

「そうだ！ ヒナタ、この後暇？」

「うん、暇だけど」

「じゃあ一楽行かない？ 卒業祝いやるってばよ」

「うん、行く」

「よし！ それじゃあ一楽にGOだってばよ！」

こうしてナルトとヒナタは、周りの嫉妬の視線も何のその、腕を組んで、ストロベリながら、ラーメン一楽へと向かった。

「おっせええええ！」

「うるさいわよナルト！（でもホントに遅い！）」

下忍編成日当日、ナルト達は、壮絶な待ちぼうけを喰らっていた。下忍の班の編成は、一時間前には既に終っており、他の班はいずれも担当上忍が迎えに来て教室を出ていつている。だが、ナルトの班の担当上忍だけは一向に姿を現す様子がない。

「なんでこんなに遅いんだってばよ、上忍が遅刻してて良いのか？部下に示しがつかないとか思わないのか？」

「ナルトっつさい！少しは黙んなさいよ」

担当上忍のあまりの遅さに愚痴を垂らしまくるナルト。そうとうストレスが溜まっているようだ。それに注意しているのは『春野サクラ』、編成でナルトと同じ班になった女の子である。口ではナルトを注意するような事を言っているが、彼女も、内心担当上忍に対して、グツ殺すとか物騒な事を考えていたりする。そして、それを不機嫌そうな顔で見ているのが、もう一人の班員『うちはサスケ』である。彼もやはり、担当上忍の遅刻に腹を立てているようだ。

それから十分経ち、三人の不機嫌が最高潮に達したとき、それはやってきた。

「やー諸君、元気してる？」

「「「っざけんなあああああ！」」」

三人の叫びは、歓楽街まで届いたそうなの……。

「さてと、じゃあまず自己紹介からいってみようか」

「自己紹介って、何言えばいいのよ」

「そりゃあ、好き嫌いとか、将来の夢とか、趣味とかそんなのだ」

「ちよつと待って、その前に先生のこと教えてよ。見た目物凄く怪しいんですけど」

いきなり自己紹介しろと言い出す担当上忍に対して、サクラが物凄く失礼な事を言う。まあ、いきなり遅刻してきて、しかもマスクと額当てで素顔を殆ど隠してる人間を怪しいか怪しくないか聞かれたら、間違いなく怪しいと答えるだろうが。

「ん、俺か。オレは『はたけ カカシ』って名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない！ 将来の夢……って言われてもなあ……ま、趣味は色々だ……」

（（結局わかったの名前だけじゃん））

カカシの余りにもやる気のない自己紹介に、再び三人の心がシンクロする。いまならシャイン パークすら撃てそうである。

「ハイ、じゃあ次お前等な。ホレ、一番右から」

「俺？ 俺の名前は『うずまきナルト』、好きなものは一楽のラーメン、もっと好きなのはヒナタ。嫌いなものはイチヤパラ。将来の夢はエロ仙人を越す！ 趣味は修行だってばよ」

ここでも思いつきり惚気るナルト。しかも本人それを自覚していないのが尚性質が悪い。

その後、サスケが未熟な殺気を振りまいたり、サクラが壊れかけたりしたものの、なんとか無事に自己紹介は終った。

「よし、自己紹介はここまでだ。それじゃあ早速だが明日から任務やるぞ」

「任務ってどんなの？」

「まずはこの四人であることをやる」

「あること？」

「サバイバル演習だ」

「エッヘン」

突然、ナルトがどこからか魚の人形を取り出し、それに胸(?)を張らせた。鯖威張るという事だろう。

「……何で任務で演習やるんですか？ 演習ならアカデミーで散々やりました！」

サクラがこれでもかと言わんばかりの気迫で反論する。ナルトはスルーしたようだ。サスケもサクラに同意するような表情をする。こちらもナルトはスルーである。

「相手はこのオレだ、だからただの演習にはならんよ」

カカシの言葉を聞き、サスケとサクラは表情を引き締める。ちなみにナルトは……地面にのの字を書いていじけている。

「ま、楽しみにしてるよ」

「せめて内容だけ教えてください！」

痺れを切らし、サクラが質問する。だが、カカシは人を小馬鹿にしたような態度を崩さず、ニヤニヤ笑いながら言う。

「いや……ま！ ただな……。オレが言ったらお前ら絶対引くから」

その様子は、非常に楽しそうである。

「卒業生二十七名中、下忍と認められるのはわずか9名。残りの18名は再びアカデミーへ戻される。この演習は脱落率66%以上の超難関テストだ！」

ところが、一変して真面目になったカカシの台詞に、サクラは顔を青くし、サスケも表情を陰しくする。ナルトは……まだいじけていた。

「ハハハ、ホラ引いた……ってナルト、いい加減機嫌直せ」
「わかったってばよ」

カカシにそう言われ、渋々立ち上がるナルト。そのナルトの様子に苦笑しつつ、カカシは最後に、

「じゃ、そういうことで明日は演習場でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持って来い。それと朝飯は抜いて来い……吐くぞ！ま、詳しい事はプリントに書いといたから、明日は遅れないように！」

そう言うと、カカシは三人にプリントを渡した。

「吐くって！？そんなにキツイの！？」

サクラの動揺は丸わかりだ。サスケも、今まで以上に表情を陰しくしてプリントに目を通す。ナルトは……鶴を折っていた。

こうして、今日は昨日となり、明日が今日となった。

第四話「サバイバル演習」

「やー諸君、おはよう！」

「ふざけんなあ！」

サバイバル演習当日、待ち合わせ場所にやってきて、さわやかに挨拶する担当上忍を罵倒するその生徒。普通ならば態度不良ということで問題にもなりかねないが、これにはきちんとした訳があった。

「初っ端から遅刻してんじゃねーってばよ！ しかも五時間、やる気あんのかー！」

そう。彼、はたけカカシは、班が決定してから最初の任務で遅刻してきたのだ。しかも五時間。大抵の人間なら許せないだろう。しかも昨日、朝食を抜いて来いといわれたお蔭で、三人は腹ペコだったりする。

「いやあー、今日はちよつと目覚し時計が壊れててな！」

「嘘つけ！ おもくそ正確に時間刻んでんじゃねーか！」

そう言つて、カカシは目覚し時計を取り出すが、ナルトの言葉通り、その時計は正確に時を刻んでいた。たった今、三人の頭の中に『殺』の一字が浮かんだのは、仕方の無い事だろう。

「ま、細かい事は気にするな。それより演習だ演習、昼までに終わらせるぞー」

ナルトの非難を軽く流して、カカシはそう言ったが、ただいまの時刻十時五十分。昼まで後一時間も無い。ナルト達は、まだ何か言いたそうな視線をカカシに向けていたが、流石にこれ以上時間を延ばしたくないと思ったのか、大人しくカカシの説明を聴くことにした。

「さて、ここに二つの鈴がある。これを俺から昼までに奪い取る事が今回の試験の課題だ」

目覚し時計をセットして丸太の上に置きながら、カカシはそう言った。そして二つの鈴を三人に見せた。

「もし昼までに俺から鈴を奪えなかった奴は昼飯抜き！あの丸太に縛り付けた上に、目の前で俺が弁当を食うから、そのつもりで」

カカシがそう言い終わると同時に、三人の腹の虫が鳴いた。それを愉快そうに眺めると、カカシは続きを言う。

「まあ、鈴は一人一つ取れば良い。二つしかないから、必然的に一人は丸太行きになるという寸法だ。そもそもって、鈴を取れなかった奴は任務失敗という事で失格！つまり この中で最低でも一人は、卒業した学校にもう一度通ってもらう事になるという訳だ」

その言葉に、サスケとサクラに緊張が走る。確実に誰か1人が落ちる試験、もしかしたら自分が落ちるかもしれないという可能性が心の中に残っていたアカデミー卒業という余韻を根こそぎ消し去り、サスケとサクラの表情が険しくなる。

ナルトはというと、この試験を疑り始めていた。自来也の下で修行してきたナルトは、かつて自来也相手に全く同じ事をした事がある。

る。結果は惨敗。鈴を取るどころか、触れる事すら出来なかった。確かに、目の前の上忍は自来也よりは弱いだろう。だが、今の自分からすれば、十分化け物の域に入る強さを持っている。それが解った故、下忍にもなっていないひよつ子が、目の前の人物から鈴を奪う事がどんなに困難かという事が解ったのだ。

「どうやらこの試験の内容は全員わかってくれたようだな。さ、話はこれくらいにして始めようか」

鈴を腰に付けて、カカシは更に言葉を紡ぎ、

「手裏剣でもなんでも使って来い。殺す気でこないと一生取る事はできないからな」

さも当たり前のように言ってきた。

「使っても良いって、それじゃ先生が危ないわよ!」

それを聞いて、サクラが止めに入った。手裏剣やクナイは、簡単に人を殺せる。アカデミーでも、何度も実習で使い、恐らく怪我もしてきたのだろう。

「ホントになんでも使って良いんだってば? 言っとくけど手加減は出来ねーってばよ?」

「ちよつとナルト! アンタ何言って「ああ、どんどん使って来い。殺す気で構わん」先生も!」

「サクラちゃん、心配するだけ無駄だってばよ。相手は上忍、俺らから見れば化け物の類に十分入るってばよ。ハッキリ言って力の差が開きすぎてる。さっき手加減できねーとは言ったけど、しようと思っただってできる相手じゃねーってばよ」

ナルトのその言葉を聞いて、三人の表情が変わった。ナルトの顔からは、既に普段の馬鹿っぽさは抜けている。カカシは、ナルトの評価を少し改めた。昨日のやり取りも会って、頭の方が弱い奴かと思っていたが、どうやらそうでも無いらしい。相手の力量をキチンと把握し、自分も態勢を整えた上で、さり気間に仲間にも注意を促している。下忍にしては、良い判断をする。カカシはそう思った。

「さて、これ以上話してたら時間が短くなる。それじゃあ、よいいスタートの合図で始める。いいな？」

そう言っ、カカシは三人の顔を見渡した。もう少し会話を楽しんでいたい気もしたが、これ以上話していると本当に時間が無くなる。

「よし！　じゃ、始めるぞ。よいい　」

ナルトをはじめ、サスケもサクラも、構える。

「　スタート！」

カカシが言った瞬間、全員の姿がその場から消えた。

「忍びたる者　気配を消し、隠れるべし」

そう呟く。別に、アカデミーを卒業したばかりの下忍候補がどこに隠れようと、直に見つけ出せるのだが、とりあえず忍びの基本に忠実なのは良い事だ。

「さてと、皆上手く隠れたな……って、ナルト、お前何してんの？」

誰から見てもよいかと考えていると、自分の五メートルほど手前に、ナルトが姿を現した。思いもよらぬ行動に、カカシは思わず呆れてしまう。先程評価を改めたが、撤回しようかとも思った。が、

「上忍相手にいくら隠れたって無駄だつてばよ。なら、自分の得意な分野で精一杯やるほうがマシ、そう思わない？ 先生」

ナルトのその言葉で、やはり撤回するのを止めた。ナルトは自分が隠れても無駄な事を悟っているのだ。だからといって、いきなり真正面から現れるのもどうかと思うが、少なくとも、油断はするべきではないと感じた。

「そうか。で、得意な分野って何だ？」

「体術。俺つてば結構自信あるよ？」

「ほう、そりゃ楽しみだな。それじゃ、忍戦術の心得その一。『体術』を教えてやろう」

そう言つて、カカシはウエストポーチから何か取り出した。巻物ではないから、少なくとも忍術書では無さそうである。そして、カカシがその本の表紙を捲ったとき、ナルトはそれが何であるのかを知った。

「あー！ それつてばイチャパラ！ 俺つてばその本大っ嫌いなんだつてばよ」

「そついや自己紹介の時もそんな事言つてたな…… って待て、なんでお前の歳でイチャパラ知つてんだ？」

カカシが驚くのも無理は無い。なぜなら、イチャパラは十八禁である。ナルトのような子供が知つてて良い本ではないのだ。もつと

も、五歳のときからそれに触れてきたナルトにとっては、ただの詰らない本というだけなのだが。

「そんなのどうでも良いってばよ。それより、もしかしてそれ読みながら俺と闘る気？」

「どうでも良いって……まあ良いか。ああ、お前くらいならこれ読みながらでも変わらんしな」

「ふーん、あつそ。後でぼえ面かいても知らないってばよ」

瞬間、ナルトの姿がカカシの視界から消えた。イチャパラを読みながらも、視界の隅にはナルトの姿を入れていたのだが、突然消えてなくなり驚くカカシ。ハッと気がつく、既に眼前にナルトの蹴りが迫っていた。

鋭い！

間一髪、ナルトの蹴りを避け、後ろへ跳ぶカカシ。それを見逃さずに、ナルトは丁度十字の形で手裏剣を放ってきた。空中では身動きが取れない上に、手裏剣のスピードが速い。ナルトの、少なくとも体術や忍具の扱いのレベルは、既に下忍を超えていた。

「くっ、しょうがない」

このままでは避けきれないと思ったカカシは、既に持っているだけと化していたイチャパラをポーチに戻し、代わりにクナイを取り出して、手裏剣を全て叩き落した。地面に着地すると同時に、ナルトが肉薄してくる。しかし、これを予想していたカカシは、突き出されたナルトの腕を掴み、開いた手で首筋に手刀を入れた。

「ふう、なかなか良い線いったがこれで終わり……何！」

ナルトの身体から力が抜けたのを確認して、息をついたカカシだったが、次の瞬間には、まだ終わっていない事を悟る。手刀をいれたナルトの体が、ボンツと音を立てて消えたのだ。

「影分身か……まったく、楽しませてくれる」

そう言つて、カカシは低く笑つた。まったく、面白い奴だ。体術だけではなく、上忍レベルの忍術まで持ち出してきた。次は何を出してくるのか、カカシは楽しみでしうがなかった。

試験開始から三十分、未だ、カカシが闘つたのはナルトだけである。ナルトと闘ったときから、サスケやサクラの気配は感じているが、一向に仕掛けてくる様子は無い。時刻は十一時三十分、そろそろ此方から仕掛けてみようかなあと、カカシが考えたときだった。不意に、後方から手裏剣が跳んできた。全て突き刺さつたように見えたが、実際は変わり身で避わしている。

「おらああああ！」

「やあああああ！」

手裏剣が跳んできた方向から、サスケとサクラが突っ込んできた。馬鹿正直な特攻。サクラはまだしも、天才のうちはこの程度かとカカシが内心落胆したときだった。サスケとサクラが急に二人づつに増え、これまた下忍にあるまじきスピードでカカシの四肢を封じたのだ。突然のことに、動揺するカカシ。それが命取りだった。腰のところで、チャリンという音がした。

「あ」

「へへー、これで三人とも合格だつてばよ、先生」

後ろを振り向くと、ナルト、サスケ、サクラの三人が、仲良く鈴を三人で手にしていた。

第五話「それぞれの戦い」

「……な！ き、消えたー！」「」

ナルト、サクラ、サスケの三人の叫びが、演習場内に木霊した。先程までそこにあったカカシの姿は、今は影も形もなくなっている。

「ちくしょー、やられたってばよ」

ナルトが悔しそうに地団駄を踏んだ。サクラは依然として口をポカンと開けたまま突っ立っており、サスケは苦々しげに顔を顰めた。さて、三人が何に驚いているのかというと、時間は少し遡る。

カカシの試験開始の合図と共に、ナルトは影分身を使い、それをカカシの所へ向かわせた。それも堂々と目の前に登場させる事で、意識をそちらに傾けさせるように。そして、影分身とカカシが交戦を始めると、サスケとサクラに接触した。一人では絶対に取れないと確信していたため、二人と協力する事を選んだのだ。

「二人とも、頼むから俺に協力してくれってばよ」

首尾良く二人と接触すると、ナルトは二人に言った。サクラの方は、多少戸惑うようなそぶりを見せたものの、とりあえず承諾してくれた。アカデミーでトップの成績を取ったのが効いているのだろう。だが、サスケの方は難色を示す。まあ、これは当然といえば当然だった。アカデミー時代、サスケは、一度もナルトに勝ったことが無かった。体術でも忍術でも、常に自分の一歩先をいくナルト。幼い頃の体験から、常に自分は一歩でいなければならないと思い込んでいるサスケにとって、これは許容できる事ではなかった。その

ためサスケは、事あるごとにナルトをライバル視し、敵として見てきたのだ。そんな相手に協力などしてやる気にはなれない。だが、ナルトは既に、サスケが難色を示すであろう事などは解っていた。そこでナルトは、対サスケ戦用の秘密兵器を繰り出す。

「ま、別に良いけどね。アカデミーの女子更　「へ、仕方ねえな。やってやろうじゃねえか！」　物分りが良くて助かるってばよ」

所詮はサスケも健全な一人の少年ということである。普段はクールぶっていても、やる事はしっかりやってたりするものだ。ということ、あっさりとサスケも作戦に組み込む事に成功したナルトは、二人に次のような指示を出した。

「俺が合図するまで決して俺の傍を離れず、合図をしたら、鈴を取りに行く」

「待てナルト、そのどこが作戦なんだ？」

「そうよ、全然具体的なところが解ってないじゃない」

当然、二人の口からは疑問の言葉が発せられる。それはそうだが、なにしろ具体的なことは全くわかっていないのだから。

「別に解らなくても問題ないってばよ。二人はただ鈴を取る事に集中してくれば良いから」

だが、ナルトは何も明かそうとはしない。サスケもサクラも、詰問しようとはするのだが、サクラの質問は、のらりくらりと全て避けられ、サスケは「女子更衣室」の一言で完全に無力化させられてしまっている。こうして、サスケとサクラは、結局大事な部分は何も知らされること無くナルトに協力させられる事となった。

二人を協力させることに成功したナルトは、まず影分身を二つ作

り出した。そして、その二つの影分身を、写し身の術でサスケとサクラに化けさせる。あとは、自分たちは隠れて、影分身に力カシを見張らせる。

そして今現在、ナルト達は力カシの鈴を奪取する事に成功した……
……かに見えた。が、

「いやー、まさかホントに獲られるとはねー。……でも、残念だったな」

力カシはそう言っ、愉快そうな笑みを残し、その姿を消してしまった。と同時に、三人の持っていた鈴も、消えてなくなっている。影分身を使っていたのだらう。ナルトたちは、まんまと騙されたわけだ。

そして、話は冒頭に戻る。

「チッ、時間の無駄だったな。もう良い、俺は一人でやる。お前等は勝手にしろ」

サスケが、ふいにそう言っ、その場を離れた。

「あ、待つてよサスケ君」

サクラもその跡を追う。

「おいサスケ、サクラちゃん。ったく、一人でいったって取れやしねーっての」

そんな二人の後姿を見送りながら、ナルトは呆れたように呟いた。あの二人は、自分たちが一体どんな化け物を相手にしているのかを

全く理解していない。特にサスケだ。サスケは、自分を過大評価し、他人を過小評価、というか見下す傾向がある。恐らく、あの上忍に對しても、自分なら勝てるなどといった甘っちょろい自信を抱いているに違いない。

「はあ、サスケじゃ絶対えー無理だつてばよ」

ナルトは溜め息を吐く。先程の影分身。カカシはあの時、自身だけでなく鈴まで分身させていた。物質の影分身。自分の師匠である自来也がやって見せた事があるが、曰く相当難易度の高い技らしい。非凡なチャクラコントロールと、長年に渡る修練が必要な術だとも聞いた。そして、あの上忍はそれをやってのけた。相手は、自分の思っていた以上に化け物なのかもしれない。ナルトは、己の体が震えているのを感じた。それが、歓喜なのか恐怖なのか、それは誰にもわからない。

「こんな所に居やがったか」

カカシは、最初の丸太の置いてある場所にいた。丸太に腰掛け、イチャパラを読み耽っている。言わずもがな、教育者にあるまじき姿だ。

「サスケか、もう協力するのは終わりか？」

「ふん、あいつ等じゃ足手まといにしかない。俺一人で十分だ」

カカシの、半ば挑発するような口調に、サスケは自身満々に答えた。カカシは、サスケの言葉に苦笑すると、

「さて、それはどうか。とりあえず、期待のホープ。『うちはサスケ』の実力を見せて貰おうか」

薄く笑いながらそう言った。

「へッ、あとで吠え面かくんじゃねえぞ！」

言うや否や、サスケはカカシに向かって、地を這うように疾駆していた。腰を低くした体勢のまま、手裏剣やクナイを投擲する。

「バカ正直に攻撃したって、俺には当らないよ」

丸太から立ち上がったカカシは、イチャパラから目を離すことなく、足のばねだけでそれらを尽く避けていく。最後の一つを避け終わるとほぼ同時、サスケの足が、カカシの側頭部を強襲した。が、カカシは開いている方の手でそれをガードする。防がれたサスケの方は、大して残念がる様子も無く、そのまま空中で一回転し、踵落としを繰り出してきた。それをカカシはバックステップで避けるが、瞬時に間を詰めてきたサスケが、更に拳と蹴りの乱舞を繰り出す。

チツ、なんて奴らだ。こいつといいナルトといい、イチャパラを読む暇が無い

流石に、下忍離れたサスケの体術の猛攻に、カカシもイチャパラを読む余裕など無い。全くもって、今年は面白いのが入ってきた。そう、カカシは思った。

サスケの猛攻は尚も続く。上への蹴りが止められれば下への蹴り、拳をいなされれば肘鉄。自分の知っている、ありとあらゆる種類の攻撃を繰り出していくサスケ。途中、フェイントを入れて距離をとり、至近距離からクナイを投擲した。しかも、ご丁寧に時間差でも

う一本投げている。弾くわけにもいかず、無理に身体を曲げてそれを避けたカカシの目に映ったのは、馴れた手つきで印を組んでいくサスケの姿だった。

「火遁・豪火球の術！」

「な、何イ！？（バカな、その術は下忍じゃまだチャクラ量が足りないはず）」

サスケの口から、凄まじい炎の球が放たれる。火球は、地面を抉りつつカカシに向かっていく。普通なら、ここでカカシは消し墨になっているところだろう。だが、そこにカカシの姿は無かった。

（いねえ！ 後ろか！？ いや、上か！？ クソツ！！ 何処行きやがった！？）

「下だ」

「なっ！？」

上を見上げているサスケに、突如下から声が掛かる。そして、そこから手が伸び、サスケの足首を掴んだ。

「土遁・心中斬首の術」

「うわああああ！」

サスケは、地面に思いっきり引きずりこまれ、首から上だけ残して地面に埋められてしまった。

「忍……戦術の心得その二！ 忍術だ……。にしてもお前は、やっぱり早くも頭角を現してきたか」

カカシは、サスケの前にしゃがみ込むと、そう言ってニコツと笑

った。サスケは不服なようで、不満そうにカカシを睨んだ。

（サスケ君……どこにいるのかな……）

サスケがカカシに埋められ終えた頃、サクラは身を低くし、サスケを探して森を進んでいた。あの後、サスケの後を追ったのは良いのだが、サスケの移動スピードに付いて行けず、見失ってしまったのだ。

（まさか、もう先生に……イヤ！ サスケ君に限って、そんな事ないわよ！ だってサスケ君は天才なのよ！？）

嫌な考えが浮かんできたのを、頭を振って振り払う。

ガサツ

（サスケ君！？ いや、もしかして先生！？）

慌てて身を隠し、茂みの向こうに意識を集中させる。そこには、イチャパラを読んでいるカカシの姿があった。

（危なかったわ……あと少しで声をかけるところだった……）

まだ自分の存在がばれていない事に安堵したサクラだったが、ふいに、背後から声を掛けられた。

「サクラ、後ろ」

「え！？」

その言葉を聞いた瞬間、サクラが条件反射で振り返ると、カカシが突然現れ、その目の前で木の葉が舞っていた。それを見たサクラは、ブーツとしてしまったが、木の葉が急に舞い上がった直後、ハッとなり、自分の状態を確かめた。

「！ え！？ え！？ 今の何！？ どうなってるの！？ 先生はどこ！？」

多少パニックに陥りながら辺りを見渡すが、そこにカカシの姿は無い。

「……サクラ……」

そのとき、木の陰からサスケの声がした。振り向くとそこには、

「サスケ君！？」

「サ……サク……ラあ……た、助けて……くれ……え……」

振り向いたサクラの目の前には、片腕が既に無く、片足があらぬ方向に曲がっており、体中にクナイや手裏剣が突き刺して血を大量に出しているサスケがいた。それを見たサクラは目に涙を浮かべて大声で絶叫した。

「あ、あぎゃああああああ！」

サクラが気絶したのを確認して、カカシは呟いた。

「……ちょっとばっかしやりすぎたか……」

あぎゃ ああああああ……

風に乗り、その叫び声はサスケの下にまで聞こえた。

「今の声は……（サクラのか……）」

恐らくサクラはリタイヤだろう。だが自分も地面に埋められてしまっている。人の事を笑える身分じゃなかった。

そしてその声は、当然ナルトの耳にも届く。

「今のはサクラちゃんか？」

小さく呟く。そして、

「先生、何したんだってばよ」

自分の背後に立つカカシに聞いた。

「忍戦術の心得その三、幻術。サクラの奴、簡単に引っ掛かっちゃつてな」

「幻術か……ま、良いってばよ。それより、二回戦始めてみる？」

カカシの返答をどうでも良さそうに流し、ナルトは、腰を低くして構えた。その声には、戦意が満ち溢れている。

「二回戦か、よし、来い！」
「行くつてばよ！」

そしてナルトは、カカシに向かって駆け出した

第六話「チームワーク」

（……何て奴だ。体術だけでなく既に中忍以上、しかもアカデミーを卒業したばかりだというのにチャクラのコントロールまでしっかりしている。これは子供一人で到達できるレベルじゃないぞ）

ナルトの連撃を捌きながら、カカシは、その実力に改めて感嘆した。正拳、裏拳、肘撃ちに掌底、それに上、中、下段の蹴り。それらを上手く組み合わせながら、時折忍具での攻撃も絡めて攻めてくる。しかも、その全てが重く速い。それに、

（こいつめ、さっきは本気じゃなかったな）

そう、先程交戦した時よりも、明らかに強くなっているのだ。最初に戦ったときには、せいぜい中忍の中の下位の實力だったが、今は中忍でも最高レベルの實力はあるだろう。体術だけなら、ヘタをすれば上忍すら脅かすほどだ。カカシは素直にそう思った。

だが、カカシは里一番と謳われ、他国にまでその名を轟かせるほどの忍びである。おまけに、いつも勝負を挑んでくる体術のスペシヤリストのライバルのお蔭もあり、体術の捌き方は熟知している。いくらナルトが強いとは言っても、まだまだカカシの敵ではなかった。

「クソッ、こんなんじゃ埒が開かないってばよ」

自分の攻撃が少しも当たらないのに苛立ちを感じたのか、ナルトは最後に一つ前蹴りを繰り出すと、その反動で後ろへと跳びずさった。勿論カカシはこれを掌で防いだが、予想外に威力が高かったため、

二、三步後退してしまう。その間に、ナルトは印を組み始めていた。手馴れた様子で、次々と印を組んでいく。

（子・戌・辰・亥・酉……何だあれは？ あんな印の並びは見たことが無いぞ）

先程も言った通り、カカシは他里にまでその名を轟かせる一流の忍びである。それも、ある特殊な能力により『千の術をコピーした男』と言われているのである。そのカカシが知らない術を、まだ下忍にすらなっていない子供が使おうとしているのだ。事の尋常の無さが窺える。

「……戌・寅、寅の印！ 火遁か！？」

体内のチャクラを炎に変え、それを行使する火遁系の術は、大抵が寅の印により発動する。ナルトは、寅の印を最後に、大きく息を吸い込んだ。つまり、ナルトは火遁系の忍術を使おうとしている。カカシがそう考えたのは、ある意味当然のことだった。しかし、もしカカシが、ナルトがどこぞの工口仙人から受けた修行の内容を知っていたら、また別の結論に至ったかもしれない。だが、時既に遅かった。

「火遁……」

ナルトのこの一言で、カカシの注意は、完全にナルトが使おうとしている術にいつてしまった。まさに、それこそがナルトの狙いであることも知らずに。

「もらったってばよ！」

「何！？」

瞬間、カカシの足元から、ナルトが二人現れ、カカシの動きを封じ込めた。普段ならば、避けるなり蹴り飛ばすなり出来たはずだったが、カカシの注意は全てナルトの術のほうにいつていたため、完全に裏をかかれた形となり、反応が遅れてしまったのである。

「まさか隠れ身の術とはな」

「へへ、基本的な術って結構盲点になりやすいんだってばよ。特に、レベルが上の方の忍びになればなるほど、ね」

揶揄するように笑うナルトに、カカシは些か憮然とした表情になったが、直にそれを打ち消した。そして、その表情を引き締める。

「なるほど、確かにその通りだ。今後気をつけよう」

明らかに、カカシが発する雰囲気が変わった。今までの、どこかふざけた感じのそれは完全に消滅し、代わりに、幾多の視線を潜り抜けてきた本物の忍びの発する気が、辺りに立ち込めていく。

「悪かったな、ナルト。どうやら俺はお前を舐めすぎていたらしい。これからは……」

「……！」

カカシの纏う何かに、危険なものを感じ取ったナルトは、すぐさまその場から飛び退いた。その半瞬後、今までナルトがいた場所の地面から、四本の手が這い出てきた。そして、その本体の方も地面から這い出てくる。カカシの影分身だ。カカシ本人の方に目をやると、既にカカシの動きを封じていたはずのナルトの影分身は消えており、腰を低くして構えたカカシの姿が見えるだけであった。

「本気でやろう」

その言葉がナルトの耳に届く前に、既にカカシはその背後を取っていた。軽く舌打ちしながら、後ろに向かって蹴りを繰り出すナルト。だがそれは、軽く身を捌いただけで簡単に避けられ、逆にその足を取られて投げられる。

空中に高々と放り投げられたナルトは、どうにか体勢を立て直して、反撃に移ろうとクナイを取り出すが、それがカカシに向かう事は適わなかった。眼前に迫る四枚の手裏剣。空中では避けることも出来ないため、ナルトは手に持ったクナイでそれらを叩き落とす。

だが、カカシを前にしてその行動は致命的だった。手裏剣を全て叩き落したナルトの眼に映るのは、既に印を組み終えたカカシ。

「火遁・豪火球の術！」

サスケが放ったものよりも一回りは大きい火球が、ナルトへ向かって猛進する。未だ空中にいて身動きが取れないナルトは、咄嗟に影分身を作り出し、自分を地上へ投げさせた。地面に激突するかに思われたナルトだったが、空中で巧みに姿勢を変えると、チャクラを足へと集めて落下の衝撃に耐える。

どうにか難を逃れたのも束の間、ナルトの顎にカカシのつまさき突き刺さった。その余りの威力に吹き飛ぶナルトだったが、地面を五、六メートル滑った辺りで、飛び跳ねるようにして起き上がる。そこへ襲い掛かる二撃目。風を切り裂きながら迫る拳を、ナルトは辛うじて避けた。そして、そのまま腕を取って捻りつつ、一本背負いの要領で投げる。

カカシの身体を地面に叩きつける寸前、ゴキリという鈍い音がしたかと思うと、ナルトは物凄い衝撃によって吹き飛んでいた。突然の衝撃に反応しきれず、近くにあった大木にしたたかに身体を打ち付け、流石のナルトも息が詰まる。その目に映ったのは、片腕をだ

らんとぶら下げたカカシだった。その姿を見て、先程の衝撃の正体を知る。カカシは投げられる寸前、自ら間接をはずし、そのままナルトに攻撃したのだ。

感心しつつ、木を支えにして立ち上がるナルトの視界に、二つの銀の影が映った。先程のカカシの影分身だ。そう認識した時には、既に両脇を固められ、身動きを取れなくされてしまっている。そして、

「終わりだ」

腹部に突き刺さったカカシの拳により、ナルトの意識は断ち切られた。

腹部に残る鈍痛により、ナルトは目を覚ました。目の前には、サクラと地面に埋まったサスケ、それにカカシがいた。腕のほうはすっかり元通りになっているようだ。何故かサクラが涙目なのは、ナルトが目を覚ます前に、サクラが地面に埋まっているサスケを見て再び気絶すると言っハプニングがあったからのだが、それはとりあえず置いておこう。

「お、ナルト。起きたか」

「うーん、俺ってばどの位寝てた？」

「十分そこらだ。ま、気にするな」

陽気にそう言ったカカシは、一転して表情を変え、真面目な様子になる。

「さて、今日の演習でわかったことがある。おまえら全員アカデミ

「に帰る必要はないよ」

「それって合格ってことですか!？」

真っ先にサクラが反応した。サスケも、無関心を装ってはいるが、口の端にかすかに笑みを浮かべている。二人の間に、安堵の空気が流れた。が、

「ああ、お前ら全員、忍者をやめろ」

次の一言で、その場の空気は凍結した。余りに唐突で残酷なその言葉に、サスケとサクラは混乱する。だが、意外にもナルトは冷静だった。まるで、その力カシの言葉を解っていたかのような感じだ。

「ど、どういう事!? 忍者をやめろって……そりゃ鈴は取れなかったけど……」

未だ混乱しているサクラが当惑気味に聞いた。

「どいつもこいつも忍者になる資格のねえガキだつて事だよ」

それに対する力カシの言葉は冷たい。サクラはますます意味がわからないという表情になり、サスケは頭に来て飛びかかろうとしたが、地面に埋まっていたため動けなかったため、忌々しげに舌打ちをした。

「お前ら、忍者なめてんのか、あ!？ 何の為に班ごとのチームに分けて演習やってると思ってる?」

「え? ど、どういう事?」

「つまり……お前らは、この試験の答えをまるで理解していない……」

……」

カカシはそこで言葉を切ると、三人の顔を見渡した。そして、ナルトが妙な表情をしているのに、ここではじめて気付く。

「ん？ ナルト、どうした」

「チームワーク」

その言葉に、カカシは小さく反応した。そして愉快そうに笑う。

「そうか、お前は解ってたようだな」

「うん、チームワーク。それがこの試験の答えだってだよ」

サスケとサクラは、弾かれたようにナルトを見た。なんでコイツが？ といった表情である。まあ、それも仕方が無い事だろう。ナルトは、アカデミーでの座学のテストはビリだったのだから。当然、頭が良いなどとは露ほども思われてはいない。

「そう、正解だ。3人で来れば鈴も取れたかもな」

「って、ちよつと待って……何で鈴2つしか無いのにチームワークなワケえ！？ 3人で必死に鈴取ったとして1人我慢しなきゃならないなんて、チームワークどころか仲間割れよ！」

「だからこそチームワークなんだってばよ。任務とかで報酬が人数分ない場合はどうするんだってば？ サクラちゃんはいきなり仲間割れでもする？ そんなことしないでしょ？」

答えに納得がいかないのか、カカシに噛み付いていくサクラに、ナルトが冷静に諭した。それがまた驚きだったのか、サスケとサクラは意外そうな顔をする。

「……………そうだ。コレはワザと仲間割れするよう仕組んだ試験だ」

一呼吸置いて、カカシは続ける。

「今ナルトが言ったように、このように仕組まれた試験内容の状況下でも尚、自分の利害損得に関係なく、チームワークを優先できる者を選抜するのが目的だった。それなのにお前らと来たら……。」「サクラ、お前は何処にいるのかも分からないサスケの事ばかり。ナルト、お前は最初は答えに気づいて二人と協力したからそこは評価しよう。だが、サスケを助けようと思えば助けられたのに、そうしなかったのはいただけない」

そして最後。

「サスケ！ お前は他人を邪険し個人プレイで突っ走る。確かに忍者にとって卓越した個人技能は必要だ。だがな、任務は班で行う。だから実力云々よりも重要視されるのはチームワークだ。チームワークを乱す個人プレイは仲間を危機に陥れ、殺す事になる。例えば……」

そこでカカシは一旦言葉を切り、ポーチからクナイを取り出してサスケの首に突きつけた。

「サクラ、ナルトを殺せ！ さもないとサスケが死ぬぞ」

「えー？」

「と、こうなる」

驚くサクラに対し、カカシは音も無く立ち上がる。

「人質を取られた挙句、無理な2択を迫られ殺される。任務は命懸けのものばかりだ」

その言葉を、三人は真剣な顔をして聞いていた。いや、正確に言えば、ナルトの表情にはもっと複雑なものが浮かんでいる。悔恨、郷愁、慙愧。それらが絢交ぜになった、なんとも複雑な表情だ。だが、それも一瞬の事。カカシ達が目にする前に、それは消えてなくなる。

「世の中には普通じゃない特殊な一族だっている。そいつらの場合殺されたほうが幸せな苦痛が待っているかも知れない」

カカシは、厳しい表情でサスケを横目で見つづつ言った。サスケは顔を青ざめさせ、苦い表情をする。

「コレを見る。コレは全て里で英雄と呼ばれている忍者達だ……」

弁当の置いてあった石碑の前まで行き、カカシはそう言った。

「……ただの英雄じゃない。任務中に殉職した英雄達だ……」

サスケとサクラの表情が一変する。そしてナルトも、顔も知らない父の事を思い浮かべた。

「これは慰霊碑。この中には俺の親友の名も刻まれている。………お前ら、最後にもう一度チャンスをやろ。ただし、昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ！ 挑戦したい奴だけ弁当を食え。あと、サスケには食べさせるなよ。」

「え？ ちょ、ちよつと何でよ？」

サスケに弁当を食べさせるなと言ったカカシに対し、何故かサクラが抗議の声をあげる。サスケは、黙ってカカシを睨みつけるだけ

だ。

「とにかく、良いな。お前達、もしサスケに食わせたりしたら食わせた奴を、その時点で試験失格とする。此処では俺がルールだ。分かったな」

カカシはそんな二人に取り合わず、少し強めに言い残して、その場から姿を消した。その場に少しの間、沈黙が降りる。

「……とりあえず、サクラちゃん、サスケを掘りおこすつてばよ」
「え、ああ、うん」

そして、ナルトとサクラは、サスケを掘り起こし始めた。

「……悪かったな」
「え？」
「なに、気にすんなつてばよ。これもチームワークつてやつだし」

掘り出されてから、暫くは無言で手足の状態を確かめていたサスケが、唐突に一言呟いた。その顔は、微妙に赤い。それにしても、素直にありがとうと言わない辺り、サスケらしいと、ナルトは苦笑しながら思った。

「さて、弁当食うか。サスケ、そんな所でぶすつとしてないで、こっち来て一緒に食おうぜ」
「ちよつとナルト、何言ってるのよ。サスケ君に食べさせたらアンタも失格なのよ、わかってるの？」

いきなり、サスケに弁当を食おうと言い出したナルトに対し、サクラが声を荒げた。サスケも、驚愕の面持ちでナルトを凝視してい

る。

「だから、『食わせる』んじゃないくてサスケが自分で『食う』んだってばよ。それなら何の問題も無し、オールオツケーだってばよ」

そんな二人に対し、自身満々に言い放つナルト。どうやら屁理屈で切り抜けるつもりのようなのだ。

「そんな言葉遊びじゃ言い訳にならないわよ」

「じゃあ、サクラちゃんにはサスケが飢えまくってぶっ倒れても良いの？」

「そ、それは……いや、だけど」

「なら問題ないってばよ。ほらサスケ、早くこっち来いよ」

そう言って、どこからとも無く割り箸を取り出すナルト。いきなり手の中に割り箸が現れる様は、なかなか不気味だ。流石にぎよっとするサスケだったが、直に、しぶしぶと言った様子で けれど足取りは軽く ナルト達の下へ向かった。

二つの弁当を三人でつつき、約十分ほどで食べ終えた。三人ともどうにか腹の虫をなだめる事が出来たので、今は午後からの打ち合わせをしている。その時だった。急に辺りの空気が変わり、凄まじいまでの怒気が溢れ返った。そして、

「お前らあああ！」

こちらに凄まじい表情で、カカシが突っ込んできた。瞬身の上に、煙に爆音。大した凝りっぷりである。

「きゃあ」

「チツ」

それに対し、三者三様の反応を見せるナルト達。サクラは驚いて腰を抜かし、サスケは咄嗟に臨戦体制をとる。そしてナルトは……。

「……プツ」

吹いていた。どうやら首筋で脈打っている頸動脈が壺に入ったらしい。体を小刻みにプルプルと震わせている。

「……ゴホン。ごーかつく」

そんなナルトの様子に気付いたのか、カカシは一つ咳払いをすると、気を取り直したように三人に合格を言い渡した。

「え？ ご、合格！？ 何で！？」

理解が追いついていない様子のサクラに、カカシは穏やかな声で説明する。

「お前らが初めてだ。今までの奴らは『素直に俺の言う事をきくだけ』のボンクラどもばかりだったからな。忍者は裏の裏を読むべし……忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。……けどな！ 仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ」

カカシのその言葉を聞き、ナルトの表情が曇る。先程のような、色々な感情が複雑に絡み合った表情だ。だが、それもまた、一瞬で消えた。

「これにて演習終わり！ 全員合格！ よおーしい！ 第7班は明日より任務開始だあ！」

親指を立ててそう言うカカシに、サスケとサクラの表情が緩む。そしてナルトの表情も、幾分晴れやかなものに変わっていた。

外伝 『最愛のあなた……』

今、私の膝の上で安らかな寝息を立てる、まだあどけなさの残る少年『うずまきナルト』。私の最愛の人だ。金色の髪に、整った顔立ち。今は閉じてしまっている目が開けば、その、澄み切った碧の瞳に、私は魅せられてしまうだろう。

彼は、どこまでも強く、優しく、そして自分自身に厳しい。まるで、自分自身を戒めるかのようにして、彼は過酷な修行を自分自身に課している。

人前では、常に笑顔という名の仮面を被っている彼だが、私は知っている。その仮面の裏に隠された、彼の痛みを、苦しみを、そして……哀しみを。

彼は、私に本当の顔を見せてくれた。その事は嬉しく思う。けど、その理由は、まだ教えてはくれない。恐らく、彼の師である自来也様は知っている。でも、私は知らない……少し、嫉妬。

でも、私から彼に何があったのかを聞く事はしない。たぶん、聞けば教えてくれるとは思うけど、しない。したくない。彼自身が、私に話してくれる気になる時まで、私は待とう。そして、一日でも早くその日が来るように、私は自分を磨く。

彼の、本当に信頼できるパートナーになるために。

自己紹介が遅れました。私の名前は『日向ヒナタ』。血継限界『白眼』をその血に宿す、日向一族宗家の娘にして、彼、『うずまきナルト』の妻。それが私だ。……未来の、だけど。

狐、閃光となりて 外伝 『最愛のあなた……』

私が彼に初めて出会ったのは、アカデミーの演習場だった。正直、あまり家が好きではなかった私は、授業が終った後も、残って修行をしていたのだ。

内容は、突きの打ち込み。

柔拳、特に私達日向の使うそれは、その性質上、突きが重要な役割を担ってくる。だから私は、その修行を日課として自分に課していた。

一体何回打ち込んだときだっただろうか。陽気な声とともに、一人の少年が姿を現した。この里では珍しい、金色の髪と碧の瞳。その顔には、眩しいくらい笑顔が張り付いている。

名を『うずまきナルト』というその少年は、いきなり、私のことを誉め始めた。

自分の技を人から誉めてもらったのは、久しぶりだった。

初対面の人と、こんなにも多くの言葉を交わしたのは、初めてだった。

私はなんとなく気恥ずかしくなり、気付いたときには、その場から駆け出していた。

途中、後ろから聞こえてきた言葉に返事を返したときの私は、一体どんな顔をしていただろうか。彼は教えてくれない。でも、きっとそんなに悪い顔じゃなかったと思う。

だってその時の私は、少し心の靄が晴れたような、そんな気分だったから。

それから、私達はよく会うようになっていた。彼は、いつもあの場所で修行しているようで、私も一緒に修行させてもらったらしい。

そのときに気付いた事が三つ。

一つは、彼が物凄く強い事。まだアカデミー生でしかない私から見ても、彼は凄く強い。無駄の無い、それでいて躍動感溢れる身のこなし。一つ一つの技のキレ。それに、術はまだそんなに使えないみたいだけれど、チャクラコントロールには非凡なものがある。

私も、柔拳使いとして、チャクラコントロールにはそれなりに自身を持つてはいるけど、彼のはそんなレベルじゃない。体内に眠るチャクラを瞬時にして練り上げ、そこから必要な分だけを切り出し、残ったものはそのまま留めておく。普通は、チャクラを練り上げればそれを全部使い切ってしまうのだけど、彼にはそれができる。まだ、父上や上忍の人達レベルには届かないだろうけど、それでも、彼は恐ろしく強かった。

もう一つ。それは、彼が何かとてつもなく深い哀しみを抱えているという事だ。

彼が時折見せる儂げな表情。触れれば壊れてしまいそうで、でも、触れてあげなければ孤独で押しつぶされてしまいそうな、そんな表情。彼は何を抱えているのか、私にはわからないけど、きっと、とてつもなく大きなものなのだと思う。

そして最後。そんな彼を、無償に愛おしいを思っている自分がいるという事。

いつの頃からだっただろうか、彼の姿を目で追いかけるようになったのは。

いつの頃からだっただろうか、彼の事ばかり考えるようになったのは。

いつの頃からだっただろうか、自分が少し好きになったのは。いつの頃からだっただろうか、彼がいないと物足りなくなるようになったのは。

自問を繰り返し、ようやく気付いた。私は、初めから彼が好きだったのではないかと。

だから、彼が私を好きだと言ってくれたあの瞬間。私は、泣き出していた。周りも気にせず、ただただ歡喜の涙を流しつづけた。

その時のオロオロしている彼が、ちょっと可愛かったのは、秘密。

私は、彼を愛している。彼のいない世界なんて考えられないほどに。

彼の笑顔を見れば、私の心は癒され、彼の哀しげな顔を見れば、私の心は引き裂かれそうになる。

あなたがいるから、私は笑顔になれる。

あなたがいるから、私は涙を流せる。

あなたがいるから、私はここまで強くなれた。

それでも、まだまだ足りない。彼の背負っているものを一緒に背負うには、私はまだ弱すぎる。それが無償に悲しく、寂しく、そして、苛立たい。

私はもつと強くなろう。心も、身体も。いつか、あなたの背負っているものを、私も共に背負えるように。何年、何十年経って、二人が年老いた時。

最愛のあなたの隣りで、優しく微笑んでいてあげることができるように……。

第七話「波の国へ……」

「なあナルト。大事な人を裏切るっていうのは、どんな気持ちなんだろうな」

目の前に立つ少年が放った第一声は、そんな言葉だった。さらさらの銀髪に、印象的な翡翠色の瞳。その顔を見た瞬間、ナルトの表情が強張る。

愕然。その言葉が、今のナルトの表情を表すにはピッタリだろう。

「そいつからを信頼されて、半身のように思われている存在を裏切るって、どういう気持ちなんだろうな」

（やめろ）

更に質問を重ねるその少年に、ナルトは反射的にそう言ってしまった。その少年のことは知っている。自分の、一番の親友……だった。

「なあ、どういう気持ちなんだろうな。教えてくれよ、ナルト」

（やめろ）

またも反射的にそう答えるナルト。だが、その少年は質問を止めようとはしない。

「そんなこと言わずに、教えてくれよ。俺には判らないんだからさあ」

（やめろ）

次第に、ナルトの口調は弱くなっていく。まるで、何かに怯えるかのように。

「俺は裏切られた側だから判らないんだ。そういう気持ちだ」
(やめろ)

少年の口の端が、少しだけ吊りあがる。嘲り、そして恨みの籠った笑みだ。

「お前なら判るだろ、ナルト。なにせお前は……」
(やめろ)

少年の口の端が、より一層吊りあがった。その表情に、侮蔑を込めて。

「俺を裏切ったんだからな」
(やめろ)

「……夢、か」

寝覚め最悪

ナルトは自嘲気味に笑みを洩らした。体中から汗が噴出し、寝間着が肌にベッタリと張り付いている。時刻は、まだ卯の刻を回った辺りだ。

「気持ち悪……」

そう呟いた言葉は、寝間着に対してか、それともあの夢に対してか。自分でも判らないが、ナルトは取りあえずシャワーを浴びる事

に決めた。

今日は午後から人に会う。間違っても、あいつにこんな顔見せられないな。湧き上がる嘔吐感を抑えつつ、ナルトは浴室のドアに手を掛けた。

「悪いヒナタ。遅れたってばよ」

「うっん、そんなに待ってないし」

昼過ぎになり、ナルトは、里全体が見渡せる丘の上に来ていた。そしてそこには、既に日向ヒナタの姿もある。

そう、今日はヒナタと会う予定だったのだ。偶々、二人とも任務の無い日が重なったので、久々にデートでもしようかと約束していたのである。

デートといっても、この二人がする事といえば、ナルトがヒナタに膝枕をしてもらったり、他愛も無い話をしたりしてのんびりするだけである。

「空、青いな」

「うん、青いね」

そして今も、ナルトはヒナタに膝枕をされ、空を見上げている。ヒナタは、そんなナルトに微笑しつつ、その金色の髪を撫でていた。まるで、母と子のようなのである。

「ヒナタ」

「うん？」

「好きだ」

「……うん。私も」

ナルトが、下から見上げるような形で呟いた。一瞬、戸惑ったような表情を浮かべたヒナタだったが、直に微笑を取り戻し、ナルトの呟きに答える。全く、どこからどう見てもバカップルだ。

ナルトはヒナタがいると、心が落ち着き、ヒナタもナルトがいれば、穏やかな気持ちになる。お互いがお互いが必要とし、尊重する。相手を縛り付ける事は絶対にしない。二人とも自由の身であり、それでいて自ら望んで傍にいます。

そうは言っても、婚約という言葉で互いを縛っているじゃないかと思う人もいるかもしれない。しかし、あの婚約は、ヒアシの顔を立ててした事だ。二人は、別に結婚する事に拘ってはいない。別に結婚をしなくても一緒にいる事はできるのだし、それだったら別に結婚をしなくても良いと、二人は思っている。要するに、互いがいればなんでも良いのだ。

「好きだ」

「うん」

再度、ナルトは呟く。まるで、そこにヒナタがいるという事実を確認するように。

「ヒナタは、俺を受け止めてくれるよな？」

弱々しい、問いだった。明らかに何かに怯えている、そんな感じだ。

「うん。勿論だよ」

「こんな俺でも、良いんだよな？」

「当たり前だよ。あなたは、私の最愛の人なんだから」

ヒナタが優しく笑いかけのを見たナルトは、一瞬、その瞳を揺らめかせた。恐怖と羨望の入り混じった眼差し。一体何が、ナルトの眼に映ったのだろうか？ 少なくとも、ナルトの反応を見る限り、余り歓迎できる類のものではない。恐らく、親友の面影であろう。愛する人であるはずのヒナタに、そんな思いを重ねてしまった事に対してか、自嘲気味な表情を浮かべていたナルトだったが、何かに気付いたようにその表情を打ち消した。

「……ありがとう」

そして、今度は驚くほど柔らかな表情でそう呟くと、そのまま静かに寝息を立て始めた。朝、余りにも早い時間に起きてしまったがために、どうやら寝不足だったようである。

そんなナルトに、慈しむような眼を向けていたヒナタは、ふつと口元を綻ばせ、ナルトの額に口を近づけ、

「どういたしまして」

軽く口付けを落とした。

早く、あなたが解き放たれますように

と、願いを込めて。

次の日、ナルトは木の葉任務請負所に来ていた。用件は任務終了の報告と、任務内容の迷子猫を依頼主に返すことだった……。のだが、

「ああ！ 私のかわいいトラちゃん……死ぬほど心配したのよオ！」

「ギニャー！」

思わず退いてしまった。隣りにいるサクラやサスケ、カカシも同様だ。本当に返して良かったのかとすら思う。それほど、目の前の光景は壮絶なのだ。

衣服のあちこちに豪華な装飾品を使っている、身分の高そうなお婦人。この人が、今回の依頼者であり、あの猫の御主人様である。『トラ』は、その御主人様の抱擁に涙を流してぐったりとしていた。口や目も半開きで、どう見たって憔悴しきっている。

「……返して良かったのかしら？」

「いや、まあ……これも忍の任務だよ」

些かげんなりとした様子のサクラに、カカシはそう言った。が、内心彼も同じ思いである事は明白であろう。

ナルトが、写し身の術で猫に変化して探したので、捕獲自体は大して難しくは無かったものの、猫とご主人の感動の対面ではなく一方的な頼ずりで終わりを飾って良いのだろうか。と七班の全員が思っていた。

「さて、今日はもう帰るか」

いい加減見飽きたのか、カカシが疲れた様子でそう口にした。よほど精神的にキていたのだろう、上忍が言つべきではない言葉を平然として呟いている。

「気持ちにはわからんでもないが、カカシよ、そういうことはワシに聞こえんように言わんか」

「あ、あははは、どうもすみません」

だが、その場には火影もいたのだ。うつかりそれを失念してしまっていたカカシは、慌てて愛想笑いを振り撒いた。

「ふう、まあ良い。それより次の任務じゃが……老中様の子守りに、隣町までのお使い、芋掘りの手伝いか…」

「ふざけんな！ そんなのノーサンキューだってばよ！」

溜め息を吐いて、次の任務を説明し出した三代目に、突如ナルトが噛み付いた。敬意も何も無いその言葉遣いを、カカシが呆れたように窘める。

「こらナルト、三代目に向かってなんて口の利き方してるんだ」

「えー、だって爺ちゃん爺ちゃんだし」

「だってこそつても無い」

にべも無く言い放つカカシに、何を思ったのか、ナルトは意地の悪い笑みを見せた。

「へえ、良いのカカシ先生？ 昔カカシ先生がリンっていう女の人のきが「ま、まあ、俺も少し声を荒げすぎたな。許せナルト。な、な？」……わかれば良いんだってばよ」

自分の生徒に脅される教師……憐れ。

「あ、ついでに言えば爺ちゃんも若い頃、コハルとかいう人の風呂をのぞ「わかった！ カカシ、お主らにはCランク任務を請け負ってもらおう」……人間素直が一番だってばよ」

ついでに、下忍に従うしかない火影……憐れ過ぎる。ちなみに、ナルトの情報源は、某エロ仙人である。

「どんな内容なんだ？」

カカシと三代目を、冷やかな目で見ていたサスケが聞いた。こちらも尊敬の念は欠片も無い。まあ、先程のやり取りを見ていれば無理も無いが。……微かに同情するような表情を浮かべているのは、恐らく自分も同じ目に遭ったからであろう。

「ある人物の護衛じゃ。なに、心配せんでも良い。Cランク程度でちよっかいをかけてくるのはせいぜい街のチンピラ位じゃ」

少し顔色の悪くなったサクラを見て、三代目は安心させるように言う。

「護衛対象は波の国で橋作りをしているタズナという人だな。今、当人が木の葉の里を訪れておるので、タズナさんを守って波の国まで赴き、橋の完成までしっかり護衛するのが任務じゃ」

「ふーん、で、その依頼人は？」

ナルトは少しだけ、残念そうな表情を見せた。他国の忍と戦い続けたのである。そんなナルトの様子に、三代目は少しだけ苦笑を見せたが、直に真面目な表情になると、依頼人待合室に向かって声をかけた。

「もうそこで待機してもらっとる。タズナさん、入ってきてもらえますかな？」

三代目の言葉の後、戸が開き、酒瓶を持ち、眼鏡をかけて捻り鉢巻きをした初老の男性が入って来た。

「なんだあ？ 超ガキばつかじゃねーかよ」

仮にも依頼する立場の人間が、酒瓶に口を持って行き、ぐいっと煽る。余りにも態度が悪い。

「……特に、その一番ちっこい超アホ面。お前それ本当に忍者かあ！？ お前え！」

「口の利き方には気を付けた方が良いつてばよ？ じゃないと早死にするから」

その場にいた全員が息を呑んだ。先程まではカカシ達の下にいた筈なのに、一瞬にしてタズナの後ろに回り、クナイを突きつけているのだ。

サスケやサクラは、単純に依頼人に歯を向ける事に対して驚いていたが、三代目やカカシは違う。今のナルトの瞬身のスピード。カカシや三代目ですら、なんとか目で追えるレベルだったのだ。カカシは思わず冷や汗をかく。

あいつ、まだ実力隠してたな

戦っても負けはしないだろうが、間違いなく苦戦はする。それが、今のカカシのナルトに対する感想だった。

「こらナルト、依頼人を脅してどうする、全く……」

とはいえ、放っておくわけにもいかないので、カカシはナルトの頭を軽く小突くと、タズナに向かって頭を下げた。

「すみませんタズナさん。少々やんちゃなヤツでして」

「……いや、ワシも悪かった。護衛の方、よろしく頼む」

ナルトの脅しが効いたのか、頭を下げる力カシに対して、タズナも頭を下げ返した。

こうして、平穏とは言えないまでも、無事に依頼人との挨拶を済ませたナルト達は、一路、波の国へと向かうのであった。

第八話「カカシの想い、火影の想い」

「ねえ、カカシ先生……波の国にも忍者っているの？」

里を出て約一時間ほど歩いた頃、サクラがカカシにそう尋ねた。その表情は少々冴えない。恐らく、他国の忍者と戦う事になりはしないかと心配したのだろう。

「いや、波の国に忍者はいない。が、大抵の国には、文化や風習の違いこそあれ、隠れ里は存在し、忍者もいる」

そんなサクラの様子を見て取ったのか、カカシは安心させるように穏やかな声で言った。その際、サスケとナルトが僅かに残念そうな表情をしたので、カカシは思わず苦笑しそうになる。

「大陸にある沢山の国々にとって忍の里の存在は国の軍事力に当たる。つまりそれで隣接する他国との関係を保っているわけだ。かと言って里は国の支配下にあるもんじゃなくて、あくまで立場は対等だけだな。それぞれの忍の里の中でも特に、木ノ葉・霧・雲・砂・岩の五ヶ国は国土も大きく力も絶大な為、『忍び五大国』と呼ばれている。それで里の長が『影』の名を語れるのも、この五ヶ国だけでな、その火影・水影・雷影・風影・土影のいわゆる『五影』は全世界、各国何万の忍者の頂点に君臨する忍者達だ」

少々抗議っぽくなったが、サクラの不安は大分薄れたようで、その表情にも余裕が出てきた。

「へー火影様つてすごいんだあ！（あのヨボヨボなお爺さんがそんなにスゴイのかなあ……。なんかウソ臭いわね！）」

……ついでに、自分の里の長に対して失礼な事を考える余裕も出てくる。

「……お前ら、今火影様を疑ったろ？」

その言葉に、サクラと……何故かサスケの身体が一瞬跳ね上がった。サスケもどうやら失礼な事を考えていたらしい。

「ふう、全く。まあ良い、波の国には忍者はいないから、取りあえず安心しとけ。何かのトラブルでもない限り、Ｃランクの任務で忍者対決なんてしやしないよ」

「ホントですか！ ああ、良かった！」

「……」

サクラの安堵の言葉と、カカシの言葉にタズナが僅かながら反応した。無論、カカシはそれに気付いていたが、敢えて何も言わずに歩を進める。出発の前、三代目から告げられた事を気にしながら。

「はたけカカシ、入ります」

「うむ」

扉を開け、一礼してから、カカシは火影執務室へと入った。内心、何を言われるのかとヒヤヒヤしていたが、表情には出さない。

依頼人との挨拶を済ませた後、カカシは三代目に執務室に来るよう言われていた。里外任務となるので、色々準備をしておきたかつ

たのだが、火影の言う事を聞かないわけにもいかない。ということで、カカシはこの場所にやってきていたのだ。

「カカシよ、本題に入る前にお主に伝えておく事がある」
「伝えておく事？」

思わずカカシが胡乱氣に聞き返す。歳が歳だけに、遺言かもしれないと思っても、それは仕方の無い事だ。

「うむ。お主、九尾来襲の際、どのようにしてそれを退けたか……知っておるか？」

「いえ、ただ四代目が命を犠牲にして奴を打ち倒したとしか……」

言いながら、カカシの顔が苦々しげに歪む。それも当然のこと。

四代目火影は、彼の師匠なのだ。

「確かに、里の者にはそう伝えてある。しかし、それは真実ではない。あの時、四代目は、九尾を己の命と引き換えにして、一人の幼子に封印したのじゃ」

「封印ですって！ それじゃあ、九尾は……」

「うむ、その幼子の中で生きておる」

カカシは、呆然とその場に立ち尽くした。あの九尾が、まだ生きているというのだ。もしかすれば、再びあの惨劇が起こるかもしれない。その可能性があるという事実だけで、カカシは襲い掛かって来る不安と恐怖を振り払う事が出来なかった。

「……それで、その子供というのは今どこに？」

カカシは、なるべく己の同様が表に出ないように三代目に問い掛

けた。

九尾を封じられたということは、即ちその子供は人柱力となったということだ。人中力は、その体内に封印された尾獣の力を使う事ができるため、総じて、里の内部で化け物扱いにされる。だが、今までこの里ではそういった事は起こっていない。それどころか、里の者は皆家族という概念通り、平穩そのものの暮らしを送っている。ならば、その子供は一体どうしたのか？ 導き出される可能性は、三つほどある。

一つは、既に抹殺したという可能性だが、これはまず無いといって良い。人柱力を殺した場合、その中に封印されている尾獣は、実体として現れるはずだ。そうなれば、疲弊しきったこの里など、もはやこの世界に存在してはいないだろう。

となると、残る可能性は二つだ。

そのうちの一つは、里のどこかに隔離され、幽閉されている可能性だ。だが、これも可能性としては低いだろう。何故なら、その情報ならず、噂までもを一度も耳にした事がないからだ。隠しているから当然と思うかも知れないが、そうではない。情報というものは、得てして漏れるものなのである。それも、その重要度が高ければ高いほど、漏れやすくなる。確かに、何年か前にそのような類の噂が流れた事があったが、それも直に消えていったのだ。この線もほぼ消えたといって構わないだろう。

そうなると、残る可能性は後一つ。里外へ既に追放されたという可能性だ。カカシとしては、これが一番有力だと思っている。人柱力がいくら強力とはいっても、相手はまだ子供。暗部を監視に付けて置けばまず間違いは起こらない。それに、里外のことならいくら何でも噂となつて流れ入って来ることは無いだろうし、これが一番安全な策だと思える。

「その子なら、今この里におる。それも、立派な一人の忍びとしてな」

「なんですって！」

カカシは、驚愕の声をあげた。それもその筈、自分の予想はあっさりはずれ、その子は今この里にあり、あまつさえ忍びをやっているのだという。これで驚くなど言う方が無茶な相談である。

「一体誰なのです、三代目！」

「うむ、その子の名は『うずまきナルト』。今お主が受けもつとる下忍第七班の一員じゃ」

「そんな……ナルトが……」

カカシは、二の句を告げることが出来なかった。まさか自分の教え子の中に、あの九尾を封じた人柱力がいようとは。カカシの心の中で、どす黒い感情の渦が巻き起こりかける。

「カカシよ、馬鹿な事を考えるでないぞ」

その時、三代目の声が、その渦の中へと入り込んできた。

「確かに、あの子には九尾が封印されておる。じゃが、それでもあの子は一人の人間、『うずまきナルト』なのじゃ。それが解からぬお前ではあるまい」

その言葉の一つ一つが、カカシの心の中の濁流を、清流へと変えていく。

「それに……あの子は、四代目の息子じゃ」

「な！……そう、でしたか」

悲痛な面持ちで語る三代目の言葉に、カカシは、危く自分がとん

でもない間違いを起こしかけていた事に気付いた。

そう、たとえ人柱力とはいえ、ナルトは一人の人間なのだ。そのことは、短いながらも一緒に任務をこなしてきた自分が一番良く解かっている筈ではないか。明るく、お調子者だが、時折驚くほど冷静になり、正確な判断を下すあの少年。確かに少し変わっているが、その行動には人間味が溢れている。そのどこに、あの凶悪な九尾の面影を見ようというのか。

それにナルトは、あの四代目の息子だということではないか。考えてみれば、確か尼僧としか考えられない。尾獣を封印する者は、大抵赤子に限られる。ということは、九尾を封印したときも、その対象は赤子であつたはずだ。だが、あの四代目が、他人の子に封印するわけがない。とすれば、必然的に自分の子に封印するしかなくなるのだ。それに、九尾の襲来は十二年前、ナルトの歳は十二歳。おまけに、誕生日は九尾来襲の日と同日と来ている。もはや、疑う余地はなかった。

「本当、なのですね」

「うむ。四代目が遺した巻物にも、そのことは明記されつつたそうじゃ」

一応、確認の意味も込めて聞いてみたが、やはり真実らしい。カシは、三代目が口にした、四代目の遺した巻物というのにも興味を覚えたが、あえて聞くのは避けた。変わりに口から出てきたのは、別の問いだ。

「では、ナルトのあの強さはやはり九尾の……」

「いや、ナルトは九尾の力を使つてはおらん。あやつが強いのは、ワシが自来也に預けたからじゃ。どういうわけか、忍術は全く教えとらんようだが、チャクラコントロールと体術だけは叩き込んだようじゃからのお」

「自来也様に……そうでしたか」

それなら納得できる。と、カカシは胸の内で呟いた。自来也といえば、伝説の『三忍』の一人としてその名を轟かす、超一流の忍である。その力は五影に匹敵するとも言われ、中には、その名を聞いただけで逃げ出す忍者すらいるほどである。

そんな、忍者の中の忍者のような人物に預けられていたのだ。強くない訳がない。しかも、体術とチャクラコントロールのみを教えられてきたのだという。その結果が、ナルトのあの実力に現れているわけだ。

「カカシよ、あの子を見守ってやってくれ」

三代目の言葉には、真剣な響きがあった。

「ナルトは人柱力じゃ。今は里人に知られておらんとはいえ、いつかは知れてしまうじやろう。その時に、傍であやつを守ってやる存在が必要なのじゃ」

カカシは、三代目の話を黙って聞いている。

「本来ならば、ワシが直接あやつを守ってやりたい所なのじゃが、残念な事にワシももう歳じゃ。この先何年生きられるかも解からんだからこそ、カカシ、お主に頼んでおきたいのじゃ」

暫しの沈黙が流れる。その間、カカシはずっと、目を閉じて何かを考え込んでいるように見えた。

「……三代目、私は、あいつを守ってやりたいと、そう思います。四代目の子であるというのも、理由の一つではありますが、それ以

前に、あいつは私の教え子です。私は、私の教え子に、あいつらに、少しでも大きな背中を見せてやりたいと思っています」

かつて、先生が見せてくれたように

心の中でそう付け加えて、カカシは、三代目にナルトを守る意志があることを伝えた。ただし、それは何もナルトに限ったことではなく、彼の教え子全てに共通するものである事も、同時にほのめかす。

「すまぬな。じゃがやはり、お主に任せて良かったと、ワシは思っ
とるよ」

「いえ」

カカシの返答に満足したのか、三代目はフツと表情を緩めた。

「さて、この話はここまでじゃ。あんまりしんみりしてもいかんし
のお」

だが、それも束の間。今度は一変、厳しい表情に変わる。

「ここからが本題じゃ。カカシ、今回お主達に請け負ってもらう任
務だが、どうやら裏がありそうだな」

「裏……と、言いますと？」

「うむ。任務ランクの虚偽の疑いがあったの、今特別上忍に命じて
調べさせておる」

三代目は、淡々とした口調で告げた。カカシは、その言葉を暫く
吟味した後、言葉を選ぶように問い掛けた。

「それは、最悪の場合になる可能性もあるという事でしょうか？」
「いや、まだそこまではわからぬが……可能性としては、頭に入れておいてくれ」
「解かりました」

何かわかれれば連絡させるとの、三代目の言葉を聞き終わったカカシは、一礼をして、執務室を後にした。

それにしても、今回の任務は一筋縄ではいかないらしい。下手をすれば忍同士の戦闘もあるだろう。果たして、下忍になったばかりのチームで完遂できるのか……。班の構成員は、協調性はないが、天賦の才で急激に力をつけてきているサスケ。班員の中では最も非力だが、頭の回転の速さは随一のサクラ。そしてナルト。……案外いけるかもしれない。苦笑を洩らしながら、カカシは自宅への道を歩いていった。

ちなみに、周りから見れば相当の変人であったという事だけは、ここに明記しておく。

この反応を見る限り、悪い予想は当りそうだな

タズナの反応を見て、カカシはそう確信した。やはり、この依頼人は自分たちに何か隠し事をしている。前方に見える不自然な水溜りも、それを証明していた。

（他国の忍びか……。大した事は無さそうだな。これなら……）

サスケやナルトに任せられる。そう思って、ふとナルトの方を見たカカシは、そこにあった光景に僅かに目を見開いた。

ナルトは、自分のポーチにさり気なく手をつ込んでおり、カカ

シを見てニヤリと笑ったのだ。

（気付いているのか？ いや、それよりあの笑い……）

嫌な予感がする。そのカカシの考えは、ほんの数秒後に現実となる事になる。無論、そんな事には、カカシ以外この場の誰もが気付いてはいなかったが。

第九話「偽りの依頼」

起爆札。それは、一見するとただの紙切れだが、実際には術式が書き込まれており、チャクラを込めると爆発するという、忍具のひとつである。威力は高く、質の悪い忍術などよりもよほど使えるので、忍者たちの間では重宝されるが、少々値が張るため、安易に使えないと言つのがネックである。

なぜいきなりこんなことを説明しているのか？ 答えは簡単、今、ナルトが手に持っているからである。

「（起爆札！ あの馬鹿）伏せろお！」

カカシは短くそう告げると、タズナを押し倒し、その勢いで自分も前方へと倒れ込んだ。サクラとサスケは、訳がわからないと言う顔をしたものの、日ごろの訓練の成果か、しっかり前方に身を投げ出している。そんな中、唯一人立っているナルトは、足元の水溜りに向かって手にした札を落とした。

轟音

それは、数瞬の後に、地を揺るがす衝撃と共にやってきた。地面は窪み、既にそこにあった水溜りは跡形もない。あまりの衝撃のため、サクラとサスケは数メートルほど吹き飛ばされている。

「ふむ、ちよつと威力が強すぎたかな？」

などと、呑気なことをのたまいながら、空から降りてきたのはナ

ルトである。どうやらあの爆発から、咄嗟に上に跳ぶ事で逃れたらしい。なぜか、その表情は清々しい。

「おい、ナルト！ 手前エ、一体何のつもりだ！」

爆風によつて吹き飛ばされたサスケが、ナルトに怒鳴りつけてきた。まあ、いきなり訳もわからず、近くで起爆札を使われたのだから、この反応も当然だろう。服の背中の方が少し焦げているが、それ以外には大した外傷も見当たらない。サクラも似たようなものであるし、タズナは力カシがしっかり保護していたので、無事だ。どうやら大した被害は出ていないようである。

「あー、悪いってばよ。範囲限定の起爆札だったはずなのに、失敗作だったみたいだ」

「ふざけんな、その失敗作で殺されかけたんだぞ！ 大体なんで起爆札を使う必要がある！」

「別にふざけちゃいないってばよ。丁度良い実験相手がいたから使っただけで」

鼻息も荒く突っかかってくるサスケを軽く否すナルト。その目は、サスケではなくではなく、別のものを捕らえている。

「実験相手？ そんなのがどこに……」

言いながらナルトの視線を追ったサスケは、言葉をそれ以上続けることが出来なかった。なぜならそこには、ボロボロになった忍装束を申し訳程度に身につけ、裂傷や火傷を無数に負った二人の忍びが立っていたからだ。

「あれか？ 実験相手ってのは」

サスケがそう聞くと、ナルトは軽く頷いた。その目には、微かに警戒の色が浮かんでいる。

「へえ、今を避けるのかあ。もしかして、結構やる？」

「小僧……貴様、タダでは済まさん！」

感心したようにそう言うナルトに、忍の一人が怒声を飛ばしてきた。ついでに睨みのオマケ付で。その迫力は、その辺のヤクザなどの比ではない。彼らは忍、任務として幾多の修羅場を潜り抜けてきているのだ。ヤクザなどの睨みとは内包している鬼気の桁が違う……のだが、服装があまりにもアレなため、どうしても間抜けに見えるてしまう。

案の定、ナルトは笑いを耐え切れずに噴出してしまった。カカシやサスケが、それを冷めた目で見ているが、そんなことは気にしない。

「あ、でも下忍の俺ごときに変化を勘付かれるようじゃ、やっぱり大したことないのか」

それどころか、からかいと多少の嘲りを込めてそう言い放った。その言葉に、忍二人は酷くプライドを傷付けられたらしく、眼には憎悪の輝きが灯っている。そして、それが限界に達したのか、彼らは一斉にナルトに襲い掛かろうと体勢を整えた……が、

「忍たる者常に相手を欺くべし。やっぱり大したことなかったってばね」

突如出現した二人のナルトに背後を取られ、彼らは遂に、一步も動くことなく無力化されてしまった。気絶し、その場に崩れ落ちる

二人の忍。サスケやサクラ、勿論タズナには、何が起こったのかすらわからなかった。

「うっし、撃退完了！ 俺ってばエライ？」

倒れ込んだ二人の忍を一瞥すると、ナルトは得意満面の笑みで力カシに問いかけた。

「あ、ああ。良くやったぞ、ナルト（全くコイツは、ホントに優秀だな）」

それに対して力カシは、幾分の感嘆を洩らしながら応える。初の実践で、二人の忍を相手にしてのあの手際。とてもじゃないが、一介の下忍がとれる行動ではない。力カシは、ナルトの実力に未恐ろしいものを感じずにはいられなかった。

一方、それを憚然とした表情で眺めているのはサスケである。アカデミーをトップで卒業したはずの自分。しかし、目の前の同期とはここまでの差がある。この差は一体なんだ？ あの男のように絶望的な差がある訳ではない。しかし、それは今の自分では絶対に越えられぬ壁。むしろ、こちらの方がより強いショックを受ける。届きそうで届かない。そして、自分の知らぬ間に、一歩、また一歩と置いて行かれてしまうこの無力感。

（超えてみせる。俺は、ナルトを……必ず！）

復讐という己の目的は忘れはしない。その為に自分は今生きているのだ。だが、少しの間だけ、優先順位を変えさせて貰う。まずは、ナルトを超す。復讐はそれからだ。

俺は……『うちは』なのだから

ナルトを見据えるその瞳には、狂気を孕んだ強い意志の光が灯っていた。

「ところでナルト、お前もしかして忍具作れるのかなあ？」

「んー？　なんで？」

敵を倒した辺りから数キロ歩いた地点、野宿の準備をしていたナルトに、カカシが訊いてきた。あまりに突然といえば突然な質問に、思わずナルトは訊き返してしまう。

「いやな、お前さつき「範囲限定の起爆札」とか言ってたろ？　そんなモン聞いたことないし、それに試作型みたいなことも言ってたからな。だったら作ったんじゃないかと、そういう訳」
「ああ、アレのことだってば？」

カカシの説明を聞き、何のことなのかを理解したナルトは、得意げに話し始めた。

「あれは俺が作ったんじゃないってばよ。エロ仙人がやったんだってば。あれって特殊な術式を既存の起爆札に組み込んで作るらしいんだけど、俺ってば術式とかそういうの苦手でさあ。仕方がないからエロ仙人にやってもらったんだってばよ。それでも完璧には出来なかったみたいけど」

「術式……か。なるほどな、自来也様が作ったものだったか。それなら納得がいく。悪かったなナルト、邪魔して。野宿の準備に戻っていいぞ」

「ん、わかったってばよ」

実際は、自来也が作ったのではなく四代目の遺したものだったりするのだが、巻物のことを知らないカカシでは、誤解してしまうのも無理はないだろう。それにしても、既にエロ仙人で自分の事だと理解されてしまっている自来也……合掌。

「あ、そうだ。先生、さっきの忍者つてさあ、誰を狙ってきたんだと思う？」

作業に戻ろうとしていたナルトだったが、ふと思い出したようにカカシに問いかけた。タズナの体がピクリと跳ね上がり、カカシの眉が僅かに持ち上がる。狙って言っているのではないかと疑るほど、確信をつく言動。カカシがどうやってタズナから聞き出そうかと思っていた事を、ナルトはストレートに問いかけてきたのだ。

（コイツは、バカなのか優秀なのか、いまいちわからんな）

本当に、ナルトは特徴の掴めない部下だった。普段は、頭の中身など何処かに丸ごと置いてきたように使おうとしないナルトだが、こと任務となれば、普段の様子からは考え付かないほどの頭のキレを見せる。まるで、そのために普段は脳の活動を止めているかのようなのだ。

「あー、そうだな。一体誰を狙ってきたんだろうなあ？」

だが、そんな事は今はどうでも良い。ナルトがあまりにあっさりと忍を片付けてしまった為に、一度は失ったチャンス。それを、再び作ってくれたのだ。この機を逃す手は無い。

カカシは、多少わざとらしくタズナに眼を遣いながらそう言った。ナルトも、タズナに視線を遣っている。数瞬ばかりの静寂。だが、二つの己の心内を見透かすような視線に、遂に耐え切れなくなった

のだろうか？ タズナが、ふいに掠れるような声を洩らした。

「何もかもお見通し、か。これ以上は無駄じゃろうな。……そうじや、さっきの忍が狙っておったのは、間違いなくワシじゃろう」

「え、え？ ちょっと待って。それって、どういうこと？」

タズナの言葉を聞くと同時に、サクラが驚愕の声を挙げた。それはそうだろう。先程、カカシに忍同士の戦闘はないと言われたばかりなのだ。まあ、実際には起こってしまったわけだが、あれで終わりだとタカを括っていた。だが、今の話の流れから推測すると……なまじ頭の回転が速いサクラだけに、その答えがわかってしまったのだ。

「つまり、任務ランクに偽りがあったという事だ。この先再び、忍との戦闘もあり得る」

つまりは、そういうことだ。この任務はCランクではなく、Bランク、もしくはそれ以上の任務だったということになる。

「タズナさん、これは一体どういうことでしょうか？ 依頼内容の虚偽申告は、こちらとしても非常に困るのですが」

カカシは、攻めるようにタズナに問いかけた。当然だろう。任務ランクが間違っていると、里としても非常に困るのだ。通常、Cランク任務ですら、経験を積んだ下忍に、中忍の隊長で組まれた班が行うのだ。今回のように、下忍になりたての新米がそれを行うことは、非常に稀である。その上、Bランクともなれば中忍以上の忍で組まれた班が行うのが当然なのだ。下忍がやる事などまずありえない。失敗すれば、それだけ里の名に傷が付くのだから当たり前だ。

「理由は、大体想像が付きまゝす。波の国の現状は、木の葉にも情報が入っていますしね。ですが、それならそれでこちらにも対処の使用があつたんです。何故本当の事を言つて下さらなかつたんですか？」

沈黙を守っているタズナに、更に力カシが問いかける。その口調には、強い憤りが含まれていた。

「すまん。確かに、真実を告げてしまつた方が良かったのかもしれない。ランクと言つてしまえば、希望するレベルの忍者が来てくれんこともわかつつた」

「なら「じゃが！……それでもワシには、いや、ワシ等にはそうするしか方法がなかつたんじゃ」何故……」

悲壮感が漂うほどの、タズナの訴え。力カシも思わず、口をつぐんでしまふ。よほど切迫した状況のようだ。タズナは更に続ける。

「波の国の現状は、アンタも知つておるのじやろう？ あの国は、今暗闇の中をさまよつとるのじゃ。人々の目からは光が失われ、国全体が活気を失つとる。あの、ガトーのせいだな」

「え！ ガトーつてもしかして、あの世界有数の大金持ちの……」
「そうじゃ、そのガトーじゃ」

苦渋の表情で語っていくタズナの言葉の中に出てきた人名に、サクラが声を挙げた。

ガトー。その筋では有名な名前だ。表向きは海運会社として活動しているが、裏ではギャングや忍を使い麻薬や禁制品の密売、果ては企業や国の乗っ取りと言つた、悪どい商売を生業としている男である。

「一年程前、ヤツは波の国に目を付けた。周りを海に囲まれた島国国家。海運業を営むヤツにとっては、絶好の場所じゃったのじゃろつ。財力と暴力をタテに入り込んできたヤツは、あつという間に島の全ての海上交通・運搬を牛耳ってしまいおつた」

タズナの声に、強い憤りが籠る。

「元々、海路でしか他の国と行き来の出来なかった国じゃ。そこを押さえられてしまえば、自由に貿易したり他国に言ったりする事も出来ん。ガトーは、波の国の要である交通を独占し、いまや富の全てを独占しておる」

そこで一呼吸おくと、タズナは力強く言葉を紡いだ。

「そんなガトーが、唯一恐れるもの。それが、今ワシらが作つとる『橋』なのじゃ」

「……なるほど」

そこまで黙って話を聞いていた力カシが、口を開いた。

「今まで海上交通しかなかった波の国に、新たに陸路が追加される。海上交通なら、港を押さええてしまえばどうとでもなるが、陸上となると、ガトーといえどもそう簡単には手は出せなくなる。それで、橋が完成してしまう前に、指導者であるあなたを殺そうとしていると、そういうことですか」

「うむ。お主らにはすまんと思つとる。ワシの勝手な都合のために本来遭わんでも良い危険な目に遭わせてしまう」

タズナは、そう言つて深々と頭を下げた。力カシは頭を掻きなが

ら複雑な表情をしている。自分より年が上の人間に頭を下げられると、なんとなく居たたまれない気持ちになってしまうのだ。

「別に、良いんじゃないの、先生」

そんな中、一人、ナルトが声を挙げた。その表情はどことなく暗い。

「このままおっちゃんを見捨てたら、後味悪いし、依頼金の方は橋が完成してからの出世払いってことで構わないでしょ？」

淡々とした口調でカカシに告げるナルト。いつもと変わらないように見えるが、その言葉には妙な圧迫感がある。

「まあ、そうだな。依頼金の方は俺の一存では決められないが、その後で火影様に掛け合ってみよう。任務はこのまま続行する。それでいいな、お前ら」

だが、カカシはそれに気づかなかったようだ。少し困った様子で、ナルト達三人に確認をする。サクラは少々浮かない顔をしていたが、まあ、概ねは了承のようだ。サスケとナルトは言うまでもなく、この時点で、任務の続行が決定した。

「と、いう訳で、任務は続けさせてもらいます。ですが、知っている情報は全て教えて下さい。それによって、任務の成功確立も上がりますので」

「わかった。本当に、ありがとう」

そういつて、タズナは再び深く頭を下げた。

だが、この時は誰も気付いてはいなかった。ナルトが、ガトーの名が出る度に、その表情を暗くしていった事に。その心の奥底に、激しい憎悪が渦巻いている事に……。

第十話「その男、再不斬」

「タズナ、どうやら此処までは気付かれてないようだが……」

警戒を渗ませた瞳で、周囲を見回す。

「念の為、マングローブのある街水道を隠れながら、丘に上がるルートを通る」

「……すまん」

緊張に硬くなった声を発する船頭に、頭を下げるタズナ。危険を承知で、それでも船を出してくれた事に対する、感謝の気持ちだ。

ここは、波の国の沿岸付近。ナルト達一行は、タズナの友人の小船で、ここまで来ていた。波の国は島国国家。陸の交通路がない以上、水上を移動するしか手はなかった。それも、霧に紛れ、エンジンを切り、手漕ぎでだ。自分の国に変えるだけで、護衛がいて、なおここまでの警戒を必要とする。一体木の葉に来るまで、タズナはどれだけの修羅場を潜り抜けてきたのだろうか？ 意外とスゴイ老人なのかもしれない。

「もうすぐ到着だ。準備してくれ」

船頭が、小声で指示を出す。トンネルのような穴を抜けると、マングローブの森が見えた。中は薄暗く、潜む場所も多い。待ち伏せには絶好の場所だ。

「オレは此処までだ。それじゃあな、気をつけろ」

「ああ、超悪かった」

軽く挨拶を交わすと、船は霧の中へと消えていった。

「さて、これからワシの家に向かう。護衛、よろしく頼む」

「わかっていきます。ここからは、敵の襲撃も十分予想されます。私が先頭を歩きますので、タズナさんはその後ろを。サスケとサクラを両脇に付け、ナルトを後ろに配置させます」

軽く指示を出したカカシは、警戒しつつ、歩き始めた。その後を、タズナ、サクラ、サスケ、そしてナルトと続く。

（……見られているな）

カカシは、辺りに鋭い視線を飛ばした。上陸した時から感じる何者かの視線。だがそれでいてこちらにその居所を悟らせない。それどころか、まるでこちらを誘い入れるかのような感じすら受ける。カカシという木の葉でも屈指の忍相手に、このような真似が出来るということは、相手は確実に上忍クラス。それも相当の手練だ。

（少し、厄介な事になってきたな）

カカシは、更に周囲へと感覚を張り巡らせた。どこから襲われるか判らない恐怖。自分だけならばどうとでもなるが、背後には護衛対象と教え子達がいる。彼らを危険にさらすわけにはいかない。久しぶりに感じる冷たい緊張感に、否応なく集中力は高まっていく。

「来たかッ！」

瞬間。カカシは既に動き出していた。木々の間をすり抜けて飛来

する巨大な刀。それが一行に襲い掛かる寸前、カカシの足が、その刀の腹を捉えていた。きりもみしつ、高々と空中へ舞い上がる刀。

「跳ベツ！」

次の瞬間、カカシは後ろの四人に向かって叫んでいた。訳もわからぬまま、近くの木の上に飛び移るナルト達。その直後、カカシのいる場所、つまり先程までナルト達がいた場所を、巨大な水の竜が襲いかかった。

息を呑むナルト達四人。あの巨大さでは、木の上にいるこちらまでその余波を受ける事になる。それに、カカシもタダでは済まないであろう。

しかし、カカシは動じない。腰のポーチからクナイを一本取り出すと、それにチャクラを込め始めた。青白い光が、そのクナイを包み込む。そして跳躍。頭上から襲い来るその竜を、カカシは頭から尾にかけて真つ二つに切り裂いた。形を崩し、地上に降り注いでいく大量の水。

だがそれすらも、襲撃者にとっては単なる布石に過ぎなかった。

「なかなか頑張ったが、終わりだ」

突如、後ろから声がかかった。冷たく、重い声だ。反射的に振り向くと、そこには先程の刀を振り上げている大男が立っていた。狙いは、タズナだ。

「くっ！」

ナルトが振り向きざまに回し蹴りを繰り出すが、

「遅い」

男は左腕でナルトの顔面を強打し、残りの腕でタズナを切り伏せた。縦に真つ二つにされたタズナは……だが、次の瞬間には煙となつて消える。

「何!？」

「残念だが、終わりにはまだ早いな」

僅かに動揺した男に、一体いつ現れたのか、カカシが強烈な蹴りを叩き込んだ。その威力に、吹き飛んでいく男。だが、蹴り自体は刀で防がれたようだ。ダメージは殆ど無いようで、男は空中で巧みに姿勢を変えると、両の脚で水の敷かれた地面に難なく着地した。

「影分身とはな。流石にやるじゃないか」

男は、カカシを見上げると皮肉気に片眉を持ち上げた。そして横へと視線を向ける。

「それに、まさかこんなガキが影分身を使うとは思わなかったぜ。少々油断していたようだ」

そこには、無傷のナルトと、タズナが立っていた。もっとも、タズナはナルトに背負われているのだが。

「霧隠れの抜け忍、『桃地再不斬』か。まさかこれほどの大物とはな。少々骨が折れそうだな」

言いながら、地上へと飛び降りてくるカカシ。その額宛は正常な位置までずり上げられており、いつもは隠れている左目が露になっている。

「ふん、『写輪眼』の力カシか。相手にとって不足無し、といったところだな」

力カシの左目に浮かぶ、巴形の模様を見やりながら、再不斬は刀を構えなおした。その表情には、一片の隙もない。

「そりゃどーも。こちらとしちゃあ、このまま帰ってもらいたいところだけど、そうもいかないんだろーな」

「当たり前だ。こちららも正式な依頼で動いてるんでな。プロとして、仕事はこなす」

軽薄な声音で、再不斬と会話する力カシだが、こちららも隙はない。いつでも戦闘に移れるように、全身の筋肉は、ギリギリまで張り詰めている。

「ナルト、タズナさんを連れて上へ上がれ。俺一人でやる」

「了解」

特に何の反論もせず、ナルトは上へ上がった。自分があの場においても、邪魔になるだけだと判断したからだ。相手の実力は力カシと同程度。つまり自分よりはずっと上だ。もしナルトが再不斬とサシで戦えば、三分以内に勝負は付くだろう。

「おいナルト、力カシの眼に浮かんでる模様は……」

「ああ、写輪眼だつてばよ。俺も始めて見たつてば。師匠から聞いて、存在は知ってたけど」

「（バカな、あれは『うちは一族』の中でも一部の家系にだけ、現れる特異体質だぞ）」

木の上に上がるなり、サスケが食いかかってきた。どうやら、カシの写輪眼が気になるようだ。

「どういうことだ。何故アレをカカシが持っている」

「俺が知るかつてばよ、そんなもん」

「ね、ねえ。さっきから気になってたんだけど……」

サスケが更にナルトに食って掛かろうとする中、サクラが、遠慮がちに会話に入ってきた。

「シャリンガンってなんなの？　すごい物なの？」

「……写輪眼」

サクラの問いかけに、サスケが静かに口を開いた。

「所謂、瞳術の使い手は全ての『幻・体・忍』術を瞬時に見通し、跳ね返してしまう眼力を持つと言われている。写輪眼とは、その瞳術使いが特有に備え持つ瞳の種類の一つだ」

そこで、一呼吸置く。

「だが、写輪眼の本当の怖さは別にある。写輪眼は、その眼で相手の技を見極め、コピーすることが出来る。つまり、術を盗む事が出来るんだ」

「そ、そんなにスゴイ物なんだ」

いつになく真剣に語るサスケに、違和感を感じながらも、サクラは驚いたような呟きを洩らした。

「ま、実際どんな物かは見てれば判るってばよ」

そこに、ナルトの声がかかる。その瞳は、先程から地上の二人を捉えて離さない。まるで、二人の動き全てを目に焼き付けようとしているかのような。もはや、護衛の事など頭から抜け落ちてしまっているのかも知れない。

そんな事を思うサスケとサクラだったが、二人とも、ナルトに促されるかのようにして、下の戦いへと視線を落とすのであった。

「さて、と。……いくぞ」

先に動いたのは、カカシだった。ゼロの状態から、一気に最高速まで加速する。半瞬にも満たず、再不斬の元へ到達したカカシは、手にしたクナイを一閃させた。斜め下から襲い来る鋼鉄の刃。だが、再不斬は慌てもせず、刀の柄の部分でそれを受け止める。刃が柄に食い込み、カカシの動きが、一瞬だけ鈍る。その一瞬が、このレベルの戦いでは致命的となる。その隙を見逃さず、繰り出された再不斬の蹴りは、カカシの鳩尾に直撃する。くの字に折れ曲がったカカシの顔面に、すかさず強烈な殴打を叩き込む。ミシツと確かな手応え。だがしかし、その手応えは次の瞬間には無となって消え失せる。影分身だ。

「何度も同じ手が通用すると思っっているのか！」

後ろに現れたカカシを、力任せに蹴り飛ばす再不斬。どうやら、影分身は読まれていたようだ。だが、

「まさか、思っちゃいないよ。それはただの時間稼ぎだ」

蹴り飛ばされたカカシは、これも煙となって消え、そこから少し離れた位置に、カカシの姿が現れた。

「丑・申・卯・子・亥・酉・丑・午・酉・子・寅・戌・寅・巳・丑・
未・巳・亥・未・子・壬・申・酉・辰・酉・丑・午・未・寅・巳・
子・申・卯・亥・辰・未・子・丑・申・酉・壬・子・亥・酉」

手早く何かの印を結んでいく力カシ。

「その印は!？」

その印に見覚えがあるのか、再不斬は、眼を見開いた。そして、
術は発動する。

「水遁・水龍弾の術!」

現れたのは、先程の水の竜。先程とは打って変わって、今度は再
不斬へと襲い掛かる。

「ちい、やってくれる。だが、俺にこの術は効かん!」

後ろへと跳びず去りながら、再不斬は印を結んでいく。そして、
竜が到達するか否かと言うタイミングで、

「水遁・屹立水柱の術!」

再不斬の前方に巨大な水柱が立ち、水竜を下から突き上げた。そ
の圧力に、形が保てなくなり、崩れる水竜。水滴が、雨のように辺
りに降り注いだ。

「クク、まさかあの時に既にコピーしていたとはな。流石はコピー
忍者力カシ、見事だ」

「お褒めに預かり光栄だな。だが、そろそろ本気でいかせて貰うぞ」

余裕の笑みを浮かべる再不斬に、カカシは不適に言い放つ。

「そうか、それじゃあ 俺も本気になろう」

それに対して再不斬は、未だ余裕の笑みを崩さず、構えた。

戦いは、まだ始まったばかりだ……。

第十一話「霧と仮面」

（す、凄え……）

下で繰り広げられている凄まじい戦いを目の当たりにしたサスケは、そう思わずにはいられなかった。多種多様な忍術、体術の応酬。確かにそれも十分に驚嘆に値する。しかし、もっとも驚くべき部分は、彼ら二人の身のこなしだ。

体の捌き、脚の運び、ありとあらゆる動作に、一切の隙がない。全てが必要最小限に抑えられており、どの体勢からでもすぐに次の行動へ移れるよう、計算しつくされている。実際、彼らの戦いは流れるように滑らかに展開されており、美しくすらある。それは、その計算しつくされた動き故だ。

（俺じゃあ、まだあそこまではできねえ）

サスケは、下唇を噛む。あの動きをコピーしようとしても、できない悔しさに。いや、動きのシミュレート自体はできるのだ。どうすれば一番効率が良いのか、どうすれば一番確実なのか。そういった理想の動きは、既にわかっている。しかし、サスケにはまだその動きはできない。何故か？ 体の動きが着いていかないのもあるが、最大の要因は絶対的な経験の不足だ。

サスケは、これまで本格的な戦闘の経験というものが殆どない。確かにアカデミーで演習は積んできたが、本当の闘争の前では、正直あんなものはお遊びに過ぎない。命と命の遣り取り、一瞬の油断が即、死に繋がる緊張感。そういったものをまだ、サスケは体験した事がなかった。それゆえ、どんなに上手くシミュレートしても、実践に出たら動けない。足りないからだ、覚悟が。どれほど強くと

も、死ぬ事はないだろう、などと欠片でも思っていれば、それが動きを鈍らせる原因となる。そしてそれは、直接的に死へと繋がってゆく。

（くそ、俺はこんなもんだったってのか！）

激化していく眼下の戦いを半ば睨み付けるようにしながら、サスケは己の力の無さを悟った。あの男に一族を殺されてから、自分は死ぬ気で修行してきた。少なくとも、そう自分では思っていた。

だが、実際はどうだ？ 上忍のレベルは、自分の予想をはるか超えた超人的なものであつたし、あまつさえ同期のナルトはその上忍に近い実力を持っている。同年代の奴らより優れている程度で、自惚れている場合ではなかった。火遁が少し使えるくらいで、満足すべきではなかった。

（俺は……弱い……）

サスケは考える。

自分の今までしてきた事は、決して間違いではなかったはずだ。事実、それなりの力は付いた。だが、ナルトとはまだずいぶん差がある。ナルトと今の自分では、立っている位置がまるで違う。あいつとの決定的な差はなんだ？ 考えてみれば、答えはあっさり出てくる。

師の、存在だろう。やはり、独学では限界があるのだ。誰かに支配されたくないなどと、下らない意地を張っている時ではない。より強くなるためなら、なんでもしてやる。ナルトやカカシと、同じ目線に立てるのなら、プライドなど捨ててやる。

（俺は、もっと強くなりたい）

サスケの中の強くなりたいと思う衝動。今まで負のベクトルを向いていたそれが、初めて、前向きな思考へと変わった。ただ、己を高める為に強くなりたい。自分の野望とは別に、サスケは、そう思ったのだ。果たしてこれが良い兆候なのか、それともそうではないのか。それは、時を待つしかない。

（ちい、水がある状態では此方が幾分不利だな）

再不斬に牽制の手裏剣を投げつつ、カカシは思案する。再不斬は元霧隠れの忍、つまり水遁を主に使う。水遁系の術は、体内で水を作り出しても良いのだが、それではチャクラを多く消費してしまう為、周りに水があつた方が効率的に戦える。よって、今の状況は、かなり再不斬にとつては有利と言えるものだった。

（仕方がない、まずはこの水を……）

逆を言えば、この水さえなければ再不斬の水遁の威力は落ちるということだ。カカシは、口元を隠しているマスクを引き下げると、一般人では最早視認する事すら不可能な速度で印を結んでいく。そして、

「……消す！ 火遁・火龍炎弾の術」

マスクを引き下げたカカシの口から、巨大な火龍が出現し、再不斬を襲う。荒れ狂う火龍は一直線に再不斬へと突き進んでいく。灼熱のその身は、地表を覆う水を蒸気へと変貌させた。

「フン、しゃらくさい。水遁・水龍弾の術」

しかし、敵もさるもの。カカシが火龍を放つとほぼ同時、水中から水の龍を作り上げて相殺する。

一瞬の交錯　そして衝撃

消失した二頭の龍に代わり、辺りを大量の蒸気が埋め尽くした。数瞬の静寂。それを破ったのは、再不斬の重く不吉な歪笑だった。姿の见えない再不斬の声は、何処か愉快気だ。

「クク、カカシ、お前は二つのミスを犯した」
「何？」

引き下げたマスクを元に戻しつつ、カカシは眉を顰めた。ハツタリ……ではないだろう。そんな真似をするような男ではない。とすると、自分は本当に何かのミスを犯したことになる。

（クッ、何の事だ？）

カカシは、額に嫌な汗が伝うのを感じた。そんなカカシを嘲笑うかのようにして、再不斬は指を一本掲げる。

「まず一つ目。この蒸気だ」

「蒸気、だと？」

「そう、蒸気だ。何か変だと思わないのか？」

再不斬は、辺りに浮かぶ蒸気を指差した。それに比べられるようにして、カカシもそれらに目を遣る。宙に浮かび続ける蒸気。別段、おかしいところは……いや、

「……浮かび続ける、だと？」

「今頃気付いたか。普通の水蒸気がこんなに長く浮かんでいられるわけがないだろう。これは俺のつくり出した『霧』だ」

再不斬は更に、嘲るように続ける。

「礼を言っぜカカシ。お前が媒介になる蒸気を出してくれたおかげで、少し性質を変えてやれば霧を作り出せた。無駄にチャクラを食わずに済んだぜ」

「くそ」

カカシは、己の迂闊さを呪った。そう、水蒸気も基はといえば水、つまり再不斬の術の媒介だ。それにもっと早く気付くべきだったのだ。そうすれば、まだ対策もあった。しかし、もう遅すぎる。霧はどんどん濃度を増していき、もう、視界はほぼゼロだ。

「カカシ。俺の特技、何だか知ってるか？」

「……無音殺人術」

「そう、正解だ。俺の本業は暗殺。視覚を使わず、聴覚やその他の感覚のみでターゲットを掴むサイレントキリングが、俺本来の戦闘スタイルだ。つまりカカシ、お前は既に俺の獲物なんだよ」

不気味に哄笑する再不斬に、カカシは顔を顰めた。状況は最悪。完全に相手の術中に嵌ってしまっている。こうなってしまった以上、こちらでも気配を読んで行動するしかないが、再不斬もプロだ。気配の絶ち方は完璧で、上手く追うことができない。加えてこの霧だ。相手の姿が見えないという状況は、不安と焦りを倍増させる。

冷たい汗が、背中を流れた。瞬間、背後で一瞬膨れ上がった殺気に、カカシはその場を飛びのいた。直後、先程までカカシがいた空間を、巨大な刀が両断する。あと一瞬、いや、半瞬でも遅れていれば、カカシの体は頭から真っ二つにされていただろう。

「クク、今のを避けるとは。流石は、木の葉の看板忍者といったところか」

再び姿を消した再不斬の、感心したような声が霧の中に響き渡る。だが、今のは厳密に言えばカカシが避けたわけではない。再不斬が、態々避けられるレベルに押さえたのだ。

切りかかる寸前に、一瞬だけ現れた殺気。再不斬ほどの腕の持ち主なら、それすらも消し去る事は十分に可能だったはずだ。しかし、再不斬はあえてそれをしなかった。何故か？

見せ付ける為だ。いつでも殺せるということを。どんなにあがいても、全て手の平の上で踊らされているだけだということを。そして同時に、次は殺すという宣言でもある。

「おっと、そういえば、お前の二つ目のミス。まだ教えてなかったな」

更に、再不斬は愉しげな口調で続ける。カカシは、その声の出所を探ろうとするが、山彦の術を使われているせいで居場所を特定する事ができない。

「この二つ目が、お前の致命的なミスだ。カカシ……」

再不斬がそう告げたその時、上方から甲高い叫び声が降ってきた。サクラの声だ。まさか、という考えがカカシの脳裏をよぎる。

「お前、俺が独りで殺りに来たと思ったか？」

その無慈悲な一言は、背後から、死への斬撃を伴って振り下ろされた。

時間は、少し遡る。

「どうなってるの？ 下が全く見えないわ」

突然、霧によって下の様子が見えなくなったナルト達は、混乱していた。これでは下で何があっても対応できない。カカシのことだから万が一は無いと思うが、再不斬に強襲されたときのことを鑑みると、安心もできなかった。

「なあ、あの先生大丈夫なのか？ 超心配なんじゃが」

今まで黙っていたタズナが、心配そうに聞いてきた。

「ああ、カカシ先生なら多分大丈夫だってばよ。あんなんでも一応上忍だし、超強えーんだぜ？」

それに対しナルトが、軽くタズナの口調を真似しながら応えた。それによって、僅かながら、タズナの表情にも笑顔らしきものがある。しかし、

「危ない！」

「きゃああああああ」

次の瞬間、サクラの悲鳴が辺りに木霊した。目の前で、ナルトの手から血が噴出すのを見てしまったのだ。そして、タズナの微かな笑みも、眼前に差し出されたナルトの手に刺さった、針のような武器を目にして消え去ってしまう。

「ぐッ」

ナルトは辺りを確認すると、手に刺さったその武器を勢い良く引き抜いた。地が噴出すが、増血丸を飲み込んで収める。

（くそ、完全にやられた）

ナルトは、内心で悪態を吐く。完全に裏をかかれた。最初の再不斬の登場、あの時点で、既に布石は打たれていた。必要以上に派手な登場。あれで、完全にナルト達の意識は再不斬一人にいつてしまっていた。他にもう一人いるなんて、考えもしなかった。

「ナルト！」

サクラが慌てて駆け寄ってこようとするが、

「来ちゃだめだ、タズナのおっちゃんの傍にいて！」

ナルトがそれを制する。相手の実力の程は、先程の千本の投擲スピードで大体把握できた。サスケよりは強いだろうが、自分よりは下だ。だが、手に負傷を負ってしまって、影分身位しか使えない今の状態ではかなり不利だ。一応サスケもアテにはなるのだが、それでもまだ少々厳しい。当然、カカシのアシストも期待できない。今のこの状況では、タズナの傍を離れるわけにはいかなかった。

「今のに反応しますか……完全に虚を突いたはずなんですが、甘く見すぎていましたかね」

少年、というのには少々高すぎるその声の主は、ナルト達の背後

の木陰から現れた。仮面で顔を隠している為性別まではわからないが、背格好からして、ナルト達と同年代くらいだろう。

「お前がさっきの攻撃の主か？」

サスケが、仮面を睨みつけながら凄む。その口調には、先程の攻撃に反応できなかった事に対する苛立ちが滲み出ていた。

「ええ、そうです。まさか、防がれるとは思ってませんでしたけどね」

仮面は、関心したたような口調で話す。だが、同時に、まだ幾分の余裕も感じさせた。

「ですが、防いだ彼は手に傷を負ってしまった。それでは印を結べないでしょう？ となるとこちらがかなり有利だ。どうです、その人を大人しく渡してくれませんか？ 仕事なもので」

タズナを指差しながら、仮面は、表面上丁寧に告げてくる。だが、その裏には強烈な殺気が込められており、サクラなどは完全に畏縮してしまっている。

「フン、思いつきり殺気を叩きつけながら言う台詞か。答えはノーだ。こっちだって仕事なんだ」

だが、サスケには効かなかったようだ。こちらも殺気を込めて、相手に言葉を叩きつける。

「ふう、しょうがないですね。僕は君たちを殺したくはありません。ですが、少々痛い目に遭ってもらいます」

「だから殺気を叩きつけながら言う台詞か！」

仮面の少年が動いた瞬間に、サスケも動き出していた。互いの武器は千本とクナイ。

空中で交錯する白と黒の影。そして、互いに別の木の枝へと着地する。被害は……サスケが頬に掠り傷、仮面の少年が仮面へのヒビ、実力はほぼ互角だ。

「フン、その程度でどうにかできると思っていたのか？」

「いえ、まさか。これからが本番ですよ」

サスケの挑発を軽くないなすと、仮面の少年は片手を胸の前に持っていき、印を結び始めた。

「馬鹿な！ 片手印だと！？」

あり得ない光景に、サスケの目が驚愕に見開かれる。ナルトも、軽く眉を顰めた。

「秘術・千殺水翔」

仮面の少年が軽く手を振り上げると、下から宙へと舞い上がってきた水が、無数の千本へと変化していった。

「避けてください、死にますから」

そして、無数の千本は猛スピードでサスケへと直進していく。四方から襲い来る無数の水の千本。逃げ場は無い。

（殺られる！）

サスケが、そう思った瞬間だった。突如目の前に現れた黄色の影が、襲い来る千本を全て叩き落していく。そのスピードは、サスケや仮面の少年の比ではない。

「勝手に諦めてんなよサスケ。まだまだこれからだぜ？」
「チッ」

目の前で不敵にそう言い放つナルトに対し、サスケは何とも言えない複雑な表情を作った。強いて言えば、照れているような、だろうか。

「あれを全て叩き落としますか。やはり、君は危険だ」

そんな二人を見て、仮面の少年は二度目の感心したような声を発した。だが今度は、先程よりもより、真剣さを増している。

「殺したくはないんですが、仕方ありません。本気でいきます」

そういつて、仮面の少年はナルト達が今まで見たことも無い印を結ぶ。すると、今度は下から上がってきた水が、千本ではなく巨大な鏡に変貌していく。

「秘術・魔鏡氷晶」

無数の鏡が、ナルトとサスケの三百六十度全てを取り囲む。

「これからは、君たちは何もできない……ただ、僕の攻撃を受けるだけだ」

不気味な言葉を残し、仮面の少年は、鏡の中へと入り込んでいった……。

第十二話「戦闘 前編」

世界が、白銀に満たされる。前後左右、そして上下。全てが、白に覆われていた。

「何だ……これ」

ナルトが、驚愕の呻きを洩らした。口には出さないながら、サスケも同じ心境だ。今まで、見たことも無い術だった。ナルトも、自来也から多種多様な それこそありとあらゆると言っても良いほどの 術を受けた事がある。だが、この術はその内のどれにも当てはまらない。

自ずと、周囲への警戒心は高まっていく。そして、

「避ける！」

僅かな空気を裂く音と共に、千本が飛来する。狙いは的確、確実に急所を狙ってきている。しかもその投擲スピードは、先程とはまるで別物。視認することすら難しい速さだ。

ナルトは、反応の追いつかないサスケを蹴り飛ばすと、その場でクナイを構えた。後方から襲い来る凶器は約十本、先程の術に比べれば無いのも同然である。おまけに、狙いの的確さ故に来る場所が特定できる。いくらスピードが速いとはいえ、全てを叩き落すことは可能であった。

「流石ですね。これも防ぎますか。でも、今のは大体全力の七割位です。投げる本数も抑えておきました」

だが、仮面の少年は、無慈悲な言葉を投げかける。全力の七割、ナルトは戦慄を覚えた。今の速さは、自分が全力で投げたクナイの投擲スピードに匹敵するのだ。つまりこの少年は、それ以上の速さで千本を投擲できるという事になる。上には上がいるという言葉を、ナルトはあらためて思い知った。

「サスケ、悪いけどお前の面倒まで見て遣れそうも無いってばよ。自分で何とかしてくれ」

「当たり前だ、だれが手前エの面倒なんかになるかよ！」

警戒を促すナルトの言葉に、ナルトの立っているすぐ下の枝で体を起こしたサスケは、己を鼓舞するように怒声で応える。実際、サスケは恐怖していた。先程の千本の襲撃には、反応しきれなかった。おそらく、ナルトに蹴り飛ばされていなければ何本かはこの身に刺さっていただろう。

「次は全力でいきます。死にたくないなら、急所は庇ってください」

その言葉が届くか否かの瞬間、ナルトの視界に僅かな影が映った。それを目で確認する愚は犯さず、横へ跳ぶ。先程まで立っていた場所に、何本もの千本が刺さった。下を見ると、サスケの身に何本も刺さっているのが見える。どうにか急所は避けたようだが、それでも厳しい状況には変わらない。

「これも避けましたか。ですが、そちらの彼は無理だったようですね。それに、あなたも見切ることはできなかったようだ」

ナルトのジャンパーの裾に刺さっている千本を指差して、少年は静かに告げる。

「ここは僕の世界。氷に閉ざされた、脱出不可能な魔界。その上、君たちの足場は上下に枝が三本あるだけ。もはや、君達には……」
「ふざける！ この程度で殺られてたまるか」

少年の言葉を遮って、サスケは怒号を叩き付けた。全身から訴えかける痛みを無視して、もはや組みなれた印を結んでいく。

「鏡ごと溶けやがれ！ 火遁・豪火球の術」

サスケの口から、巨大な炎の塊が吐き出された。その大きさと速度は、以前力カシに放ったときよりも更に上がっている。

直撃。数枚の氷の鏡は、中の少年もろとも豪火に吞まれて消え失せた……ように見えたのはしかし、サスケ幻想に過ぎなかった。

「な……」

直前までサスケの顔に浮かんでいた喜色は消え去り、代わりとばかりに、険しい表情が浮かぶ。鏡も少年も、まるで何事も無かったかのように、そのままの姿で健在だった。

「残念でしたな。炎で溶かそうという考えは悪くありませんでしたが、あの程度の火力と衝撃ではこの鏡を溶かす事などではしませんが、サスケは内心毒吐いた。」

少年の言葉に、サスケは一つ歯軋りをした。言外に実力不足と言われているようなものだ。一体世の中には何人化け物がいやがる、と、サスケは内心毒吐いた。

一方、サスケに密かに化け物呼ばわりされた事など露も知らない（実際、化け物だったりもするのだが）ナルトは、状況の把握に普段使わない頭をフルに活動させていた。

（まずいな。あのお面の術、並の火力じゃ効果が無いみたいだつてばよ。やるんなら火龍炎弾位のレベルは欲しいけど……ああ、やっぱり他の術の修行もしとけば良かった）

ナルトは、今更ながらに後悔した。自来也からは、一切術の修行は受けていない。というより、四代目の巻物に書かれている術以外を習得する事は、ほぼ全面的に禁止されていた。何故か、というのは聞いていない。ナルトは、自来也を信頼しているし、尊敬もしている。こと修行に関しては、自来也の言う事に間違いはないとわかっているのだ。

ナルトにとって、自来也は言わば父であつた。顔も知らないもう一人の父とは、別の。

（まあ、覚えてたところで今のこの手じゃ使えやしないし、覚えてる術で何とかしてみるってばよ）

だから、と言うわけではないが、ナルトはとりあえず開き直つた。そう、どのみち今の状態では術など使えはしないのだ。使えもしない術に頼るより、今できる範囲内でこの状況を打開する方法を考えたい。たほつが、よほど建設的である。

使える術は影分身と変化の二つ。忍具は、手裏剣八枚、クナイが五本、煙玉一個に起爆札一枚だ。幸い、チャクラにはまだ余裕がある。術に換算して、多重影分身三回と影分身十五体、変化十二回くらいだ。命が懸かった場合はこの限りではないが、それだけは絶対にしたくなかつた。それでは、あの時から何も成長していない。あの、狐に侵された時から……。

「サスケ、まだ動けるか？」

「誰に向かつてもの言つてやがる、当たり前だ」

嫌な考えを頭の中から閉め出し、ナルトはサスケに確認の言葉を送った。帰ってきたのは、怒声にも近いサスケの声。ナルトは、それに対して苦笑をもらし、周囲を見渡した。

無数に浮かぶ鏡に映る、仮面の少年。どれか一つが本物で、残りは鏡に映っているだけだろう。その証拠に、先程から一方向からしか攻撃はきていない。その本物さえ探し出せば、まだ勝機はあるはずだった。だが、そのナルトの予想は裏切られる。

ナルトとサスケは、敵の攻撃は必ず一定の方向からだと思い込んでいた。それゆえ、攻撃が来る方向さえ気をつけておけば、少なくとも致命傷だけは避けられると思っていたのだ。だが、

「これで君たちの動きを確実に止めます。悪く、思わないで下さい」

今度の攻撃は、先程の『千殺水翔』という術のように、あらゆる方向から飛来してきた。意表を突かれ、ナルトもサスケも、一瞬反応が遅れる。

「ぐっ……」

サスケの口から、苦鳴が洩れる。頭部への攻撃だけは何とか避けたものの、体の至るところに千本が刺さっている。はっきり言って、これ以上戦闘を続けられるような状態ではない。

一方、ナルトの方も、ダメージを負っていた。見た目はサスケと似たようなものだ。だがそれでも、脚へのダメージを最小限に留めたのは、やはりナルトなればこそだった。

「残念ですが、この中に実態などありませんよ」

少年は、諭すように言葉を紡ぐ。

「鏡に映る僕。そのどれもが偽りであり、また、どれもが実体でもあります。つまり、鏡に映っている僕は、どれもが僕自身であるということです」

その声には、勝利を確信した響きがあった。サスケはもはや戦力として数えられないし、ナルトも、満身創痍の状態のはずだ。次で仕留められる、その思いが、少年に普段ならしないようなミスを犯させた。自分の術を態々解説するというミスを。

「ふーん、つまり鏡に映ってるのは全部お前本人ってこと？」

「……そうです」

突如、軽薄そうな声でナルトが問いかけた。それに不審を感じながらも、少年は首肯する。それが、仇となった。

「つまり、鏡を全部ぶっ壊せば良いってことだ」

「ええ、そうです。ですが、それができないのは先刻証明済みのはず。残念ですが……」

「多重影分身の術！」

少年は、それ以上言葉を紡ぐことができなかった。目の前に現れた無数のナルト。数を数えるのも馬鹿らしい。それは、到底あり得る光景ではなかった。一体、どれだけのチャクラを込めればこれだけの分身が生み出せるのか？

現れた分身たちは、それぞれ枝にぶら下がったり木にしがみついたりしている。いまや世界は、白銀から金色へとその色を変えつつあった。

「そんな……馬鹿な」

「さて、それじゃ、悪いけどそろそろ出させてもらうつてばよ。腹も減ってきたんでね」

少年の呆然としたような呟きを、ナルトは無視した。代わりに、作り出した分身たちを一斉に跳躍させる。

「く、そんな事をしてても意味はありませんよ。この鏡は絶対に壊せません」

少年は、焦ったような口調で、自分の優位を主張した。そう、サスケの放った火遁ですら、ビクともしなかったのだ。分身をいくらずき出したところで、それがどうこうできるはずはなかった。

「さて、それはどうかな？ この至近距離で何かが爆発でもしたら、結構ヤバいんじゃない？」

「何を言つて……まさか！」

鏡に取り付いた分身の一人の言葉に、少年の顔が、その仮面の下で驚愕に彩られた。見れば、別の場所にいた筈のサスケを、ナルトが抱えている。

「そのまさかだつてばよ。……ハアッ！」

ナルトがチャクラを込めた瞬間、生み出した分身たちが一斉に爆発した。辺りに鳴り響く凄まじい轟音が、爆発の威力の強さを思い知らせる。それが、至近距離で爆発したのだ。当然、仮面の少年の方もただでは済まなかった。

「く……まさか、こんな手を使つてくるとは」

周囲を囲んでいた鏡は全て消えてなくなり、ギリギリのところでは逃げたのか、仮面の少年は少し離れた木の枝の上で膝を付いていた。服はところどころ破れ、仮面は砕け散って、額から血を流した素顔を曝け出している。やはり、ダメージは免れなかったようだ。

「は、ざまーみろってばよ」

一方、ナルト達の方も、口では余裕そうなことを言っているが、サスケは気絶しており、ナルトもチャクラの使い過ぎで立っているのがやっとだ。

元々影分身は、チャクラによって擬似的な外殻を作り、その中でチャクラを循環させることによって作られている。そのため、強い衝撃によって外殻を壊されたり、チャクラの供給をカットされたりすると、その存在は消えてなくなるのだ。逆に多くチャクラを与えすぎると、循環が上手く行われなくなり、その形を保てなくなる。先程の術も、それを応用したものである。

風船を思い浮かべてもらえば判りやすいのではないだろうか。風船は、空気を入れれば大きくなっていくが、入れすぎると破裂してしまう。それと同じだ。つまり、外殻が耐え切れないほどのチャクラを一気に流し込むのである。流し込まれたチャクラは外殻の中に一時的には留まるが、やがて耐え切れずに外殻を突き破り、外へと発散する。そうする事によって生み出されるエネルギーが、風船よりしく、分身を爆発させるのだ。無論、これを行うには、緻密なチャクラコントロールとチャクラの量が必要となる。まして多重影分身との併用である。人並み外れたチャクラを持つナルトであるからこそできる技だった。

「まさか、こんな芸当ができる人間がいるとは思いませんでした。ですが、仕事は完遂させてもらいます」

膝立ちの状態で息を切らせていた少年が、突如、跳躍した。狙いはタズナだ。ナルトとサスケは動けない。傍にはサクラがいるが、彼女にどうにか出来る相手でもなかった。

「僕の勝ちだ」

少年の手にした千本が、タズナの首筋に突き刺さった。首筋から血を噴出し、その場に崩れ落ちるかと思われたが、そうはならなかった。

「く、また影分身か」

少年は、悔しそうに下唇を噛んだ。ナルト達の方を見やると、無傷のタズナが立っている。先程少年が千本を突き刺したのは、タズナ本人ではなく、ナルトの影分身が変化した姿だったのだ。

ナルトは、分身を爆発させるのに全てのチャクラを使わなかった。使った後、自分が動けなくなるのは明白であったし、そうなれば仮面の少年がタズナを狙うであろうと思ったからだ。それゆえ、ナルトは爆発の最中、分身の一つをタズナの元に遣り、すり替えておいたのだ。そして、タズナを連れた影分身は上方の枝へと飛び移り、機を見て本体と合流する。ナルトの機転は、ほぼ完璧だった。

「本当にやってくれますね。ですが、僕も手ぶらで帰るわけにはいきません」

だが、ここでナルトの甘さが露見してしまう。タズナのことばかりを気にかけていたナルトは、サクラの存在を失念してしまっていたのだ。そこに、少年の付け入る隙があった。

呆然と立ちすくんでいるサクラに目を付けた少年は、目にも止まらぬ速さでその首筋に手刀を叩き込み、気絶させてしまった。

「この方は人質として預かせてもらいます」
(しまった！)

ナルトが気付いた時には遅かった。少年は、既にサクラの体を抱え込み、下の霧の中へと身を躍らせている。チャクラも切れ、体中に傷を負った今の状況では、追いかけてようも無かった……。

第十二話「戦闘 前編」(後書き)

こちらでもクイズを一つ。回答は感想のほうに書いていただけると幸いです(お前はどこの営業者だ(笑))

この中で、今後のカップリングとして正しいのはどれでしょう？

- 1、ヒナタはどーしたあ！ ナルト×サクラ
- 2、やっぱりこれでしょ？ サスケ×サクラ
- 3、禁断の恋なのか！？ カカシ×サクラ
- 4、ヒュンケルとマアムの如く 仮面の少年(笑)×サクラ

さあ、どれ？

当たった方には抽選で、外伝のリクエスト権プレゼント！(いらねえ)

では、今後もよろしくお願いします。

このクイズは終了致しました。

第十三話「戦闘 後編」

「死ね、カカシ！」

死角からの強烈な斬撃。速さ、重さ、角度。そして、何よりも重要な『間』。全てが、完璧と言える一撃だった。

もう一人の襲撃者を匂わせる発言をし、それにカカシの思考を集中させ、間を置いて答えを与えた瞬間に僅かに見せる、動揺。それを逃さず、完全に死角から襲撃したはずだった。

絶対不可避のタイミング。だが、それでもなお、カカシは反応した。

「ぐっ！」

肉を断つ感触が、刀を通して伝わってくる。だが……浅い。

（反応しただと！？）

肩口から腰の付近にかけて、深い傷を負ったものの、急所だけは避けている。再不斬ですら、完全に決まっただと思えるタイミングで、だ。恐ろしいまでの反応速度。やはり、舐めてかかれる相手ではない。

「やってくれるな、カカシ。まさか今の一撃で仕損じるとは思わなかったぜ」

「……ック、褒め言葉と受け取っておこうか」

思わず発した賞賛の言葉に、息を切らしつつカカシは返答する。やはり、急所は避けたと言ってもかなりのダメージを負っているようだ。

（くそ、まずいな）

ポーチから取り出した増血丸を噛み砕きながら、カカシは顔を顰めた。流石に、霧隠れの鬼人と呼ばれるだけのことはある。これ程の高レベルな水遁忍術に、並外れた体術、それに加えて暗殺に関するスキルの高さ。このまま後手にまわり続けていては、殺られるのは確実に此方だ。それに、ナルト達の事も気になる。そう簡単にやられるとは思わないが、出来れば早く助けに言ってやりたい。となると、残された道は一つ。

（此方から攻めるしかないか……）

だが、それが一番の問題だった。視界は再不斬の作り出した霧で覆われ、ほぼゼロに等しい。加えて、此方が耳や鼻で動きを察知しようとしても、再不斬の動きはほぼ無音な上、刀に着いた血は下に敷いてある水によって洗い流されてしまう。それに対し、再不斬は此方のたてるどんな小さな音も聞き逃さず、完璧に動きを把握してくる。闇雲に動き回っても、殺されるだけだ。

（……待てよ、水か！）

だが、そこでカカシはあることに気付いた。そう、今、地面には水が敷かれている。それゆえ、カカシはチャクラを使ってその上に立っているし、それは再不斬も同じはずだ。ならば、まだ打つ手は残されている。それも、とびっきりの上策が。

「再不斬！ この戦いにもそろそろ飽きてきた。悪いが、終わらせてもらっぞ！」

カカシは、どこにいるかも知れない再不斬に向かって思いっきり叫んだ。今思い付いた策に、上機嫌になったわけではない。こう叫ぶ事によって、相手の中に「何かあるのか？」という考えを芽生えさせ、迂闊に近づき難くさせたのだ。無論、再不斬相手では僅かな時間を作り出すに過ぎないだろうが、その僅かな時間が、カカシにとっては何よりも重要であった。

「フン、つまらんハツタリを。勝ち目などどこにもありません！」

案の定、再不斬の嘲り声は聞こえてきたが、攻めて来る様子はない。カカシは、静かに右腕にチャクラを集中させ始めた。集められた膨大な量のチャクラは、次第に体外へと漏れ出し、視認できるまでになる。それに、強く、念じる。

本質は雷……変化しろ、目を覚ませ。高く鳴け、遠く轟け、強く輝け！ 我が右腕は、雷光の一撃！

カカシの右腕が、青白く発光する。小刻みに鳥のさえずりのような音が聞こえ、右腕の雷は、より強い光を放った。これこそが、コピー忍者と呼ばれるはたけカカシ唯一にして最強の固有忍術。掌に集中させたチャクラを、己の持つ雷の性質変化によって変質させ、更にそれを凝集させる事によって、爆発的な威力を生み出す超高等忍術。その名は……

「雷切！」

カカシは、右腕を足下の水へと叩き付けた。高く水飛沫が舞い、腕の雷が、周囲へと分散し始めた。水の通電性の高さは、今更言うまでもないだろう。放たれた雷は四方へ分散し、周辺を手当たり次第に蹂躪していく。水面を這い、時に弾け、時に跳ねる。手近な気をなぎ倒し、尚も暴れ狂う。そこはもはや、雷によって支配された世界。逃げ場などどこにもない。

「ぐあああああ！」

絶叫は、背後からやってきた。それが耳に届くと同時に、跳躍する力カシ。言うまでもなく、叫び声は再不斬のものである。叫び声によって、居場所が特定できたのだ。

「力……ガ、シィー！」

再不斬の傍に着地、いや着水すると、憎悪の竦った視線が送られてきた。雷をその身に浴びたせいか、体は辛うじて動くようだが、呂律が回っていない。

「術に溺れたな、再不斬。こんな破られ方、想像もしていなかっただろう？」

緩慢な動きで近づいてくる再不斬に、力カシは静かに告げた。その双眸には、冷たい光が灯っている。

「この！」

再不斬が怒りに任せて刀を振るうが、如何せん遅い。そのスピードはもはや、ナルトはおろか、サスケですら避けられる程度でしかなかった。言わずもがな、力カシが当たろうはずもない。傷を負った今の状態でも、十分に余裕を持って避けきる。

「術を過信しすぎたな、再不斬。確かに、さっきの術に嵌れば、お前を捕捉することはほぼ不可能だろう。補足出来なければ攻撃も出来ない、つまりお前は絶対安全のはずだった。だからお前は俺を殺す事に集中しすぎて、周囲への警戒をおろそかにしてしまったんだ」

再不斬を組み伏せながら、カカシはクナイをその首筋に当てた。再不斬はなんとか抜け出そうとするが、感電の影響が残る今の状態では、カカシから抜け出す事はかなわない。

「再不斬、お前の敗因は一つだ」

言いながら、カカシは視界の隅に、薄くなつた霧の中を近づいてくる影を捉えていた。十中八九、再不斬の仲間だろう。

「お前らは、この俺とアイツらの力を舐めすぎた」

「……確かに、そうかもしれませんね」

カカシの言葉に答えたのはしかし、再不斬ではなく、近くに降り立った先程の気配の主だった。呼吸の荒さからみて、相当消耗しているようだ。ナルト達にやられたのだろう。視界の隅に移る姿や声から判断して、おそらくまだナルト達と同年代。まだ少年と言える年齢で再不斬と行動を共にしているのは確かに賞賛に値するが、だが、驚くには至らない。

カカシ自身、そのくらいの年齢の頃には既に中忍になっていたし、ナルトの例もある。こと忍者の強さと言う点に関して、年齢は全く関係ないのだ。一握りの才能に、恵まれた環境、そしてそれに見合う努力が伴えば、いくらでも強くなれるのである。

「またこっぴどくやられたようだな、白」

「ええ、すみません再不斬さん。負けてしまいました」

カカシに組み敷かれた状態で、再不斬はその少年の方を向いた。顔には、何故か薄ら笑いが浮かんでいる。白と呼ばれた少年の方も、特に悔しそうでもなく負けたと口にした。どこか、不自然。

今、再不斬達は圧倒的に不利な状況にあるはず。再不斬本人はこうしてカカシに命を握られているし、背後の少年にしても、実力はカカシには遠く及ばない。そんな状況で、なぜこつも余裕を持っている？

「悪いが、俺もまだ依頼が済んじやいないんだ。そろそろ終わらせてもらうぞ」

「残念ですが、あなたに再不斬さんは殺せませんよ。ここは退いてもらいましょう」

「……何？」

カカシが再不斬の首を断とうとしたとき、白が突然、声をかけた。反射的に目を向けるカカシ。その目に映ったのは、見覚えのある桃色の長い髪。

「サクラ！」

「動かないで下さい！ この娘を殺しますよ？」

咄嗟に駆け出そうとしたカカシに、白の怒号が飛んだ。腕に抱えられたサクラの首筋には、千本が添えられてある。カカシは、己の迂闊さを呪った。先程再不斬に言った事が、そのまま帰ってきてしまったのである。

カカシは、自分の優位を信じきってしまった。後から来た少年は、自分には到底及ばない実力だった。ナルト達に負わされたと思われる傷もあるため、注意すべきは再不斬だけ、と言う意識がカカシの中に芽生えてしまっていたのだ。それが、結果的にサクラの存在を見逃す結果となってしまった。ただ一点のみに意識を集中し、周囲への警戒を怠る。まさに、先程再不斬に言った言葉そのままであつた。

「さあ、早くしてください。このままこの状態が続けばどうなるかは、あなたもわかっているはずですよ」

白の言葉に、カカシは黙って従うしかなかった。そう、このままこの膠着状態が続けば、再不斬が感電の影響下から脱してしまうかもしれないのだ。そうなってしまえば、圧倒的に不利なのは自分。人質を取られた状態で、再不斬と戦って勝てる自信はない。完全に形勢は逆転していた。

（くそ、どうする？ サクラを見捨てるか？）

カカシは自問する。忍としては、それは当然の判断。仲間の命などよりも任務を完遂することを最優先とする。それが、忍の在り方である。

ここでサクラを見捨ててでも、再不斬と白を殺す。後の事を考えれば、それがベストな選択のはずである。だが……

（いや、駄目だ。俺はあの時に学んだはずだ）

答えはノーである。思い起こされるは、かつての親友の言葉。

仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ

忍としては、このような考え方のほうがクズである。だが、カカシはこの言葉を強く心に刻んでいる。

『木の葉の白い牙』と称され、彼の前では『三忍』の名すら霞むと言われた父。里からの信頼も厚く、英雄と呼ばれ、カカシも、そんな父を心の底から尊敬していた。だが、任務中に仲間を優先して里に大損害を与えたとして、彼の名声は地に落ちる。忍のクズと呼ばれ、里人からは白眼視され、そして……彼は何も言わずに自らの

命を絶った。

カカシには、どうしてもわからなかった。何故、父は命を絶ったのか。父のしたことは、忍としては、確かに間違っていたかもしれない。だが、一人の人間としては、決して間違った行為ではなかったはずだ。そのときカカシは、既にそのことを理解していた。だが、ならば何故、父は自害したのか？ それは自らの過ちを、認めるということなのだろうか？

答えは出ず、カカシは悩み続けた。

そんな折、任務中に親友の放った「仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ」と言う言葉に、カカシは初めて、父と、父のした行為を肯定されたような気がした。そして同時に、父の死の、真実を垣間見たような気がした。

忍として生きる事に、父は恐らく、苦悩し続けていたのだろう。

心を殺して忍としての責務を全うするか、心を守り、人間として死ぬか。そして、父は人間として死ぬ事を選んだのだ。

父は、良くも悪くも人間臭すぎたのだろう。それゆえ、己の在りように悩み、苦しみ、そして、死という名の救済を得た。それはそれで、立派な事だとカカシは思う。名誉や地位を捨ててまで、人間である事を選んだのだから。

だが、自分は違う道を歩もうと思う。例え報われなくとも、自分は人間で在り続ける。その道に、どんな苦難が待ち受けていようと、必ず生き続けてみせる。己の親友の為に。

だから、今ここで、サクラを見捨てるなどと言う事は出来ない。左眼の写輪眼も、それを許さない。

「フン、木の葉の忍は甘ちゃんだな。忍としてはクズも良いとこだ」

立ち上がった再不斬は、手足の具合を確かめつつ、皮肉気にそう言い放った。感電の影響は、大分薄れてきたようだ。

「白、来い」

カカシからは目を離さず、再不斬は白を呼び寄せた。サクラを抱えたまま、ゆったりとした足取りで、白は再不斬の下へと歩いていく。カカシは、それをただ黙って見ているしかなかった。

「さて、ここでお前とあのガキ共を殺しても良いんだが、それじゃあ面白くない」

白が傍らまで来たのを確認すると、再不斬は愉快気に口を開いた。怪訝そうな顔をしているカカシに、再不斬は更に告げる。

「カカシ、取りあえず今日のところはここまでだ。この小娘は預かっておくぜ」

「く、待て……！」

背を向けて、姿を消した再不斬と白を追おうと、足にチャクラを集めようとした瞬間、カカシの体が、糸が切れた操り人形のように前方に崩れ落ちた。いくら動かそうとしても、もはや身体はピクリとも動かない。

（くそ、何もこんなときに！）

カカシは己の体を呪った。長時間に渡る写輪眼の使用に、雷切。暗部を抜けた後、殆ど使うことのなかった二つの大技を、久しぶりに、それも一度に使ってしまったのだ。修行を怠っていたわけではないが、そこは実戦との差。おまけに今回は水上での戦いだっただともあり、常にチャクラを消費し続けていた。如何なカカシと言えども、流石に限界だった。

「この小娘の命が惜しければ、お前達だけで波の国の離れにある小屋に來い。おっと、爺は置いて來いよ？　良いな。くれぐれも、爺は連れてくるな。一週間、時間をやろう。良く考えるんだな」

薄れゆく意識の中、嘲るような再不斬の声だけが、頭の中に響いた。

第十四話「強さ」

カカシが目覚めたとき、既に一行はタズナの家に着し、カカシは客間の座敷に敷かれた布団に寝かされていた。

「……く、こっちは……」

軽い頭痛を感じながら、カカシは身を起こす。これが、写輪眼の副作用なら、指一本動かさなかっただろうが、今回の場合は単なるチャクラの使い過ぎだ。休んでる間に、少しはチャクラも回復できたようで、実戦レベルではまだまだ厳しいだろうが、日常レベルでは普段と遜色ないくらいに動けるようになっていた。筋肉の劣化も進んでいないようだし、寝込んでいたのは一日から二日程度だろうと、カカシは中りを付ける。

「おお、起きたようじゃな、先生さん」

混濁する記憶を整理していると、襖が開き、タズナが入ってきた。その声には安堵の響きがある。

「大丈夫か？ 二日も目を覚まさんかったが」

「ええ、心配をお掛けしまして。大分、身体の方は良くなったみたいです」

心配げに問いかけてくるタズナに、微笑しながら答えると（口元はマスクで見えないが）、カカシは立ち上がり、腕や足の具合を確認する。その間に、タズナがカカシが倒れてからのことを簡単に教えてくれて、そのおかげで再不斬の他に追っ手がなかったことも判った。

大体の現状を把握し終えたところで、カカシの頭に素朴な疑問が浮かんだ。自分の部下二人の事だ。タズナが無事にここにいて、尚且つ追っ手も無かったことを考えれば、二人とも無事でいるのだろうが、やはり気になるのである。

「ああ、あの二人なら修行とか何とか言って出かけたわい」

その問いについて帰ってきた答えに、カカシは少し、顔を顰めた。タズナを無事に家まで連れてきたのは評価するが、その後の護衛を疎かにするのはいただけない。確かに襲撃の可能性は低いだろうが、だからといって依頼者をほっぽりだして修行に行くとは、

（こりゃ、帰ってきたら説教の必要があるな）

と、カカシが考えたところで、タズナの後ろから、何故か修行に行っているはずのナルトが姿を見せた。

「お、カカシ先生起きたってば？」

驚くカカシをよそに、ニカツとばかりに笑うナルト。

「じゃあもう俺ってばいらないかな？ カカシ先生、あと、よろしく」

そしてそのまま、カカシに向かって片手を上げると、煙を上げて消えてしまった。そこに至って、カカシはようやく事態を飲み込んだ。

先程のナルトは影分身だったのだ。確かに、影分身なら護衛にも使える上、本体との連絡も容易に取れる。なかなか、何も考えていないように周到な奴だ。

おそらく、今ナルトにはカカシが目覚めたことが伝わったはずだ。何処で修行しているのかはわからないが、そう遠くではないはずだ。五分もすればここに帰ってくるだろう。そしたら、今後の事を話さなければならぬ。サクラの事も気にかかるところだ。

「あの、お食事はどうされますか？ よろしければお作りしますが」

と、そこまで思考を進めたところで、襖のところから遠慮がちな声が聞こえてきた。目を遣ると、エプロン姿の女性が立っている。年齢からいって、タズナの娘といったところだろう。まさか、妻ということはないはずである。

「……では、お願いします。出来れば私の部下の分もお願いしたいのですが」

「ええ、任せてください。ちゃんと三人分作りますから」

一瞬の逡巡の後に、紡ぎ出されたカカシの言葉に、その女性は柔和な笑みで答えた。そして、腕まくりをしながら部屋を出て行く。

「今のはワシの娘のツナミじゃ。……ちなみに人妻じゃからな？」

「いや、それは良いんですが」

タズナの戯言を軽くないし、カカシはこれからの行動について頭をめぐらせ始めた。一番の問題は、再不斬たちに攫われたサクラだ。助けに行かないわけには行かないのだが、そうすれば今度はタズナの命が危険に晒される。自分が残ればタズナの命はまず大丈夫だろうが、ナルトとサスケでは再不斬に対抗できない。非常に不味い状況だ。一方を取ればもう一方が危険になる。

まあ、どちらにせよ、ナルト達と相談してから決めるしかない。すべては、それからだ。

「ただいま、カカシ先生起きてるってば？」

ナルト達が帰ってきたのは、それから丁度五分後のことだった。何故かサスケに無数の切り傷があるが、一体どんな修行をしていたのであろうか？ 一抹の不安が残るところではあるが、この際は置いておこう。

「ナルト、サスケ、すまない」

カカシは、二人に頭を下げた。突然の行為に、ナルトもサスケも咄嗟に言葉が出ない。

「俺はサクラを、目の前にいながら取り戻す事が出来なかった。その上、再不斬も始末し損ねてしまった。本当に、すまない」

「いや、先生のせいじゃないってばよ」

自分の失態について謝罪するカカシに、ナルトが声をかけた。その表情は、苦渋に満ちている。

「サクラちゃんを攫われたのは、俺の責任だってば。俺の判断が甘かったから、サクラちゃんは攫われたんだ」

唇をかみ締め、自噴に駆られ、声を震わせるナルトの横で、サスケもまた、己への憤りに、顔を歪めていた。あの時、結局サスケは何も出来ないまま気絶し、あまつさえナルトの荷物になってしまった。自分がもう少し上手く動けていて、あの少年を牽制する事だけでも出来ていれば、サクラは攫われなかったかもしれない。そんな思いが、サスケの心に重くのしかかっていた。

「あの、お食事作りましたけど、どうされますか？」

立ち込める重たい空気を押しのけるようにして、遠慮がちなツナミの声がかかった。どうやら食事の用意が出来たようである。

「ああ、いただきます。よし、二人とも、まずは腹ごしらえだ。今後の事はその後に話し合うぞ」

それに便乗し、場の重たい空気を払拭するかのようにして、カカシが少し陽気な声を出した。そして、ツナミの後に続いて、さつさと部屋を出て行ってしまう。残された三人は、一様に顔を見合わせ、肩を竦めつつ部屋を出て行った。

食事を食べ終わると、カカシ達はまず、お互いの情報を交換し合った。あの霧の中での戦いでは、お互いの状況を知る術は無かったのだから、これは当然である。そして、一通りの情報交換を終えた後、話題はサクラの処遇と移っていった。

「さて、サクラのことなんだが……」

普通、こういう場合には護衛を優先させ、捕まった忍は見捨てられる。アカデミーの教科書にも載っている、忍の基本だ。優先すべきは任務の達成、そのためには多少の犠牲には目を瞑らなければならない。当然、そのことはナルトもサスケも知っている。だからこそ、二人の表情が憂慮のそれへと変わる。カカシが、サクラを見捨てるのではないかと。

「アイツは必ず助け出す。通常なら見捨てるのが正しい判断だろうが、前にも言ったとおり、仲間を大事にしない奴はクズだ、と俺は思っている。だから、サクラは助ける。言っておくが反論は許さん。異論がある奴は前に出る、殴ってやるから」

だが、そんな二人の憂慮を吹き飛ばすかのようにして、カカシは力強く宣言する。サクラは助ける、と。進んでカカシに殴られたい人間などいないだろうし、もともと二人はカカシの意見に賛成である。異論などではうはずも無く、二人ともどこことなく嬉しげな表情だ。それを見て、カカシは一つ頷くと、タズナに目で問いかけた。「これで良いか？」と。ナルト達にああは言ったものの、最終的な判断は、依頼人であるタズナに委ねられる事になる。カカシも流石に、依頼人にまで自分の都合を押し付ける事は出来ないのだ。

「ワシにも異論はない。自分の保身の為にあんな可愛い譲ちゃんを見殺しにするほど、落ちぶれちゃおらんわい」

だがそれに対し、優しげな微笑でタズナは応じた。それに、カカシも思わず顔を綻ばせる。正直、この依頼人に突っ撥ねられたらどうしようかと考えていたのだが、流石はこの国の希望と呼ばれる人物、といったところか、度量の大きさを見せられた。

サクラを救出する事が決定したところで、カカシは再び今後のことについて話し始めた。

「再不斬の言う事を信じるなら、時間的な猶予は一週間。既に二日過ぎたから実質五日だ。この五日間をフルに使って、サスケは修行に当たれ。指導は俺がやってやる。ナルトはタズナさんの護衛だ」

この指示に、修行マニアのナルトは不満げな顔をしたが、カカシの一睨みで沈黙した。そしてサスケも、ナルトと同じく苦い顔をす

る。こちらは、ナルトとの差を改めて思い知らされた為である。通常、任務中に修行など滅多にしない。まして今回は護衛任務である。護衛対象をほっぽり出してまで、修行を課せられるということは、つまりそこまで状況は切羽詰っており、自分は足手まといなのだと
言う事である。

カカシもサスケのそんな心情には気づいていたが、あえて何も言わずに説明を続ける。サスケには、これからの成長のために一度、挫折を味わわせなければならない。いつもはクールに振舞っているサスケだが、意外と精神的に脆い部分がある。天才と呼ばれる人種にはよくある話だ。幼いころから天才と言われ続けてきた為、自然と、エリート意識のようなものが芽生えてきてしまうのである。ましてサスケは、名門『うちは』の出。否応無しにその意識は高まってきたはずだ。だがそれ故に、自分より上を行くものが現れたときに、対処の方法がわからず、混乱してしまう。植えつけられたエリート意識が、自分の上を行くものを認めず、排除してしまおうとするのである。そして最終的に、自分の中でその問題を解決する事が出来ず、混乱の中で自我の崩壊に至る可能性すらあるのだ。カカシは、自分の教え子にそんな末路を辿らせたくは無かった。

「恐らく、再不斬の狙いは俺たち、いや、俺をタズナさんから引き離す事だろう。この中で再不斬とともに渡り合えるのは俺だけだからな。サクラを助け出そうと思えば、当然俺が行かなきゃならんと言っ事だ」

「でも、そしたらタズナのおっちゃんが危なくなるってばよ」

「そつだ。俺達が全員サクラの救出に向かえば、その間タズナさんは完全な無防備になってしまう。かといって、俺が一人でサクラを救出に向かったとしても、人質がいる上に再不斬とあの少年だ。救出は難しいだろう。お前たちでは言わずもがなだな。それに、いくらお前たちが強いといっても、ガトーは数で攻めてくるだろう。再不斬レベルの奴が来ることはないだろうが、はつきり言ってその場

合に、お前たちだけでタズナさんを守りきれるか疑問だ」

カカシの淡々とした説明に、ナルト、サスケ、タズナは、一様に顔を顰める。状況は、彼らが考えていたよりも深刻なのだ。サクラを救出しようと思えば、最低でも二人は必要になる。再不斬はカカシが相手をするとして、もう一人の少年を牽制する役が必要なのだ。だが、そうするとタズナの護衛が一人となり、タズナを守りきれない可能性が出てくる。先程カカシも言ったように、いくらナルトやサスケが強いとは言っても、百を超すような敵を相手にしては、勝つ見込みは薄いと言わざるを得ない。その上、タズナを護衛しながらでは、ほぼ絶望的である。それに、カカシが確実に再不斬に勝てるとは限らないし、敵が再不斬とあの少年だけでも限らないのだ。こうして並べ立ててみても、良い要素が一つとしてその中に入っていない。殆ど勝負は決まっているようなものだ。

「さて、もう判っていると思うが、現段階で圧倒的な不利に立たされている俺たちには、どうしても戦力の増強が必要になるわけだ。だが、里からの増援は見込めない。そこでサスケ、お前にはこの五日間で、最低でもあの少年と互角に渡り合えるだけの実力を身に付けてもらう」

「何？」

三人が暗い表情で押し黙っている中で発せられたカカシの言葉に、サスケが反応した。たった五日。たった五日で、カカシはサスケをあの少年と同じレベルにすると云ったのだ。

「おいカカシ、お前アイツの実力がどれ程のモンか……」

「わかってるよ。さっきお前から大体の話は聞いたし、俺自身も対峙した。今のお前じゃあ、ボロボロに負けるのがオチだろうな」

「……」

流石にそうはつきりと言われて、サスケも憮然とした表情を浮かべてしまう。それが事実である事を理解していても、やはり自分の今までの修行がすべて否定されるようで、認めたくはないのだ。

「だがな、サスケ。それはあくまで今の時点でのことだ。お前にはその圧倒的な實力差を、ほんの少しのキツカケで無くしてしまえるほどの才能が眠っているんだ。俺が保障する」

「……そのキツカケを、お前が与えてくれるっていうのか？」
「そうだ」

サスケは、再び憮然とした表情で黙り込んでしまった。実のところ、サスケは未だ半信半疑でいたのだ。カカシはなにやら確信を持っているようだが、五日という短い時間で、あの少年との實力差がそう簡単に埋まるとはどうしても思えなかった。それに、カカシのいう才能というものも、どうにも信じきれない。確かにサスケはうちは一族の出で、周りからも天才だと言われて育ってきた。しかし兄のイタチは、年齢差を考えずとも、自分とは比べ物にならないほどの強さを誇っているし、直ぐ傍にナルトという規格外がいる。カカシはまだ、サスケが高い自尊心を持っていると考えているようだが、実のところサスケは、既に自分の才能を信じられなくなっていた。

どんなに修行しても、イメージですら決して追いつけない兄。化物のような強さを持つ上忍。そしてそれに近い實力を持つチームメイト。更には仮面の少年との戦いで完敗。これらの要素が、サスケの心に劣等感を巣食わせ始めていたのだ。特に、仮面の少年の存在が大きかった。ナルトだけならばまだ、サスケも自分を騙し通せたかもしれない。だが、仮面の少年の登場は、サスケに、今まで目を背け続けてきた真実を目の当たりにさせる。サスケと同年代で、サスケよりも強い忍びなどいくらでもいるという真実を。それは、

サスケの自信を粉微塵に打ち砕くには十分なものだった。だが、

「おいカカシ、本当にそれで強くなれるんだな？」

「ああ、この修行が上手くいけば、お前は飛躍的に強くなる。それこそ、あの仮面の少年にも負けなくらいにな」

「判った。やってやる、それで強くなれるんだったらな」

サスケはまだ、強くなるということを諦めたわけではなかった。

確かに、まだサスケの頭の中は混乱したままだ。だが、その混乱の中でもたった一つだけ、決して揺るがずにサスケに訴えかけてくる感情がある。憎しみだ。あの日、自分から全てを奪い去ったあの男に対する、底知れぬ憎悪。それだけは、確固として心の奥深くに根付いているのだ。だからこそ、サスケは強さを求める。その行為が無駄だ、とは思わない。大体が、サスケは今まで自分自身を勘違いし続けていたのだ。サスケが求める強さは、別に世界で一番である必要はない。ただ、己の兄よりも少しだけ、強ければそれで良いのだ。だから、他人はどうでも良い。とにかく、自分の目指す強さは、兄の一步上。そこなのだ。

無論、こういった考えを持ち始めたからといって、ナルトやあの少年に抱いている劣等感が無くなる訳ではない。しかし、それが薄れているという事もまた、事実であった。

「先生、俺には何か無いの？ 一撃で地割れを起こすような怪力を身に付けろ、とか、舌やら首やらが伸び放題になるような術を覚えろ、とか。ね、ね、何か無い？」

とそこで、今まで黙っていたナルトが、突如としてカカシに自分にも修行を課すように詰め寄った。ナルトが口走っている内容に、聞き覚えがあるような気もしたカカシだったが、それが頭に浮かぶことは無かった。というより、ナルトが肩を掴んで物凄い勢いで揺

さぶるものだから、思い出そうとしても思い出せるものではなかったのである。

「っだああああ、いい加減揺るのは止める！ お前にもちゃんと修行はあるから。それも、タズナさんを護衛しながらでも出来るヤツがな」

自分の肩を掴んでいるナルトの手を引っぱがすと、カカシは不敵な笑みを浮かべた。

時は少し遡る。カカシが目覚める一日前の、波の国から少し離れた森にある小さな小屋。

「……ん、痛う……ここは……？」

その中に置かれた簡素なベッドの上で、サクラは目覚めるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5681a/>

狐、閃光となりて.....

2010年10月12日14時05分発行